

医学史

高橋琢也と学生達（疾風怒涛の物語）（4）（上）

友田 燐 夫

Akio TOMODA

東京医科大学生化学講座

【要約】 東京医科大学の源流は大正5年5月16日に日本医学専門学校を総退学した学生達と彼らを支援した高橋琢也らの応援者達のドラマチックな話に遡る。また、校歌に歌われている源流2つとは、学生達と順天堂の方々らの応援者を示唆する。本稿はこの2つの源流の中にあって強靱な精神力でもって東京医学講習所の開設、東京医学専門学校の設立を成し遂げた高橋琢也と学生達の暖かい交流の話を記述する。とくに本稿では大正6年半ばより大正7年4月11日までに起った幾多の困難な問題に立ち向かった高橋琢也と学生達の奮闘の状況を、1) 東京医学専門学校のための敷地購入と新校舎建設、2) 回生病院の購入問題、3) 学生達による学生団の結成と新医学校設立への関与、4) 資金調達のための東京上野での絵画頒布会、5) 文部省主導による立教大学医学部設立問題、6) 学生達の徴兵忌避問題に分けて、記述する。なお、1) より4) までは本号（上）に、5) は次号（中）に記述する。また、6) の学生達の徴兵忌避問題や、大正7年4月11日の東京医学専門学校認可に至るまでの高橋琢也と文部省専門学校局長・松浦鎮次郎（まつうら・しげじろう）との壮絶なやりとりとその結末については次々号（下）に述べる。

目次

1. はじめに
2. 東京医学専門学校設立のための敷地購入と新校舎建築
3. 中濱回生病院購入と移築について
4. 学生団の再結成と新医学校設立への関与
5. 上野における絵画頒布会による資金調達活動（以上本号）
6. 文部省主導による立教大学医学部設立問題（次号）
7. 学生達の徴兵忌避問題とその顛末（以下次々号）
8. 東京医学専門学校認可に至るまでの高橋琢也の苦闘
9. エピローグ

平成22年10月18日受付、平成22年11月9日受理

（別冊請求先：〒160-8402 東京都新宿区新宿6-1-1 東京医科大学生化学講座 友田 燐夫）

TEL: 03-3351-6466 FAX: 03-3351-6466

1. はじめに

大正5年5月16日に日本医学専門学校を総退学した四百数十名の学生達を收容するための東京医学講習所は高橋琢也¹⁾らの努力により、佐藤進（順天堂第三代当主²⁾、中濱東一郎（回生病院院長³⁾、森鷗外⁴⁾を顧問として同年9月11日に、東京物理学校内に漸く開設された。学生達は総退学直後の6月5日頃に佐藤進郎を訪問し、佐藤進に出馬を懇願した結果、9月11日の開校へと漕ぎつけることが出来た。しかしながら、高橋琢也が佐藤進に事前に連絡して協力を要請していたことはほとんど知られていない。順天堂史⁵⁾や学生達の記録「本部会記録」⁶⁾にはそのことが明らかに示されている。高橋琢也と佐藤進は江戸開成校以来の知己であったが、さらに同窓の高橋是清（たかはし・これきよ）⁷⁾、石黒忠恵（いしぐろ・ただのり）⁸⁾、三宅秀（みやけ・ひいず）⁹⁾らも同時に援護射撃を行ったというのが真相である⁵⁾⁶⁾。東京物理学校（現・東京理科大学）¹⁰⁾は大正5年当時夜間学校であったので、東京医学講習所の学生達の講義は物理学校の校舎を昼間に借用して行われた。学生達のうち、一、二年生はそこで講義を受けるとともに、化学実習などを行った。三年生および四年生は東京物理学校で講義を受けるとともに、順天堂医院で臨床見学と習得を行った。中濱東一郎所有の回生病院でも内科学の習得が行なわれた。この間の教育は順調に進んでいたが、文部省がそれを単位として認定するかどうかは別問題であった。

東京医学講習所開設後の次の大きな目標は、新医学校のための早期の敷地確保と建物の建設であり、文部省による新医学校の認可であった。しかしながら東京医学講習所の責任者となった秋虎太郎（講習所主幹）は講習所開設後2ヶ月とたたないうちに、主幹と東京医学専門学校設立委員長の職責を投出してしまった（東京医科大学50年史¹¹⁾）。設立者間の協議もあったが、中村丈夫（東京医学専門学校、大正7年卒）を中心とする学生達は再三高橋琢也を訪問し、高橋に責任者となって新医学校を設立するよう嘆願した。その結果、高橋はその重責を引き受けることとなった。高橋は東京医学専門学校を設立するために3つの資金計画案を設定した。1) 全国の富豪より創立資金の寄付を得ること。2) 国より材木の払下げを受けて、その売却益を建設資金とする

こと。3) 日本画家の協力を得て、廉価で揮毫してもらい、その絵画の売却益を資金とすること。それでも不十分の場合は、所有する絵画骨董や土地を売却することを想定した。結局は、高橋琢也は自己の財産すべてをつぎ込むこととなった。

大正6年に入ると、高橋琢也は100名以上の協賛者の温かい支援のもとに、本格的に募金活動を開始した。その活動は主として関西地方であった。高橋は関西に長期出張し、財界人や富豪を連日訪問して寄附を依頼した。それに当っては東京の協賛者より得られた数多くの紹介状が役立ったのである。この高橋琢也の募金活動には我が国実業界の雄・井上角五郎、中橋徳五郎や経済界の指導者・渋沢栄一らが協力を惜しまなかった。また、高橋と同郷の広島県人会の有力メンバーや広島藩主浅野家に由緒ある人々、高橋琢也が在職した陸軍省、農商務省、宮内庁などの人脈を総動員したかたちで募金活動が行なわれた¹²⁾。しかしながら、三井、三菱、古河などの財閥からの大口寄付は、大正6年に慶應義塾大学医学部が認可され募金活動が競合したこと、文部省による立教大学医学部構想（次号）が浮上してきことから財閥による寄付が模様眺めとなったこと、三井病院（現・三井記念病院）創設のために高橋琢也と関係が深かった三井財閥よりの寄付金額が削減されたこと、全国でいくつかの専門学校が大正7年の大学令制定を先取りして寄付活動を行なっていて競合したこと、などから、難航した。高橋琢也の募金活動の発端については前稿¹²⁾に詳述した。

高橋琢也は早期に東京医学専門学校を設立するために、大正6年6月13日に東京府下豊多摩郡大久保町東大久保に敷地（4,026坪、104,000円）を自分名義で求め、9月には新校舎の木造建築工事に着手した。不運なことに建築中の新木造校舎は棟上式直前の台風（大正6年9月30日夜半）により倒壊し、高橋琢也の資金計画は大幅な修正を余儀なくされた。しかしながら、高橋琢也は学生達とともに予定通り、大正6年12月10日より東京上野の日本美術協会¹³⁾で絵画頒布会を開催し、資金調達を開始した。この会で高橋琢也は所有する骨董絵画をすべて売却することになった。

このように学生達のために寧日ない日々を送っていた高橋琢也は大正6年7月17日、電話連絡により文部省に呼び出されることとなった。そこで伝えられたことは、現在立教大学¹⁴⁾が医学部の設立を

めざしているが、東京医学講習所の四百余名の学生達をそこに収容したいというものであった。この文部省の提案は大正7年始めまで一方的に継続され、既に東大久保の地に敷地を求め、新校舎の建設工事を開始しようとしていた高橋琢也にとって大きな障害となっていた。それ以降、文部省専門学校局長・松浦鎮次郎¹⁵⁾は高橋琢也の前に立ちはだかつて高橋琢也による新医学校設立を決して認めようとしなかった。

また、学生団の一部には、情報過多になった結果であろうか、高橋琢也の誠実な努力に対して十分な信用を措けず文部省の案に傾斜する者もいた⁶⁾。この時期、学生達は徴兵制度による入隊を回避するために東京府内の私立大学や専門学校に二重在籍していた。そのことが大正7年初頭に憲兵隊に知られることとなり、またマスコミがそれを喧伝したことから、大きな社会問題となっていた。学生達の徴兵

免除期限は大正7年4月14日であり、その日までに高橋琢也の進める新医学校の設立が文部省によって認可されていなければならなかった。

このように混沌かつ逼迫した状況にあっても高橋琢也は淡々と布石し、最善を尽くしながら時節を待った。そして、高橋琢也は信条とする「誠実」と「仁愛」を貫き通した。本稿（上）（中）（下）では以上の経緯を詳しく記述するとともに、大正7年4月11日の東京医学専門学校設立認可に至るまでの高橋琢也や学生達の壮絶な苦闘の様子を述べる。なお、大正5年9月11日より大正7年4月11日までの主な出来事について表1にまとめた。

2. 東京医学専門学校設立のための敷地購入と新校舎建築

高橋琢也は大正6年2月28日に秋虎太郎より東京医学講習所主幹を正式に委譲された。時を移さず、

表1 東京医学講習所設立より東京医学専門学校設立に至るまでの主な出来事

大正5年（1916年）

- 9月11日 東京物理学校内に東京医学講習所設立（開講式）
- 9月12日 講義開始
- 11月15日 秋虎太郎、講習所主幹を辞任。高橋琢也が受け継ぐ。

大正6年

- 1月 高橋琢也は関西地方において募金活動開始。
- 2月28日 秋虎太郎、東京医学専門学校設立委員長辞任。高橋琢也が受け継ぐ。
- 6月30日 高橋琢也は石黒忠憲男爵の斡旋により地主・中村久作より東大久保に東京医学専門学校用敷地を購入。
- 7月13日 文部省専門学校局長・松浦鎮次郎より連絡があり、立教大学医学部設立構想が提示される。
- 9月16日 回生病院の購入に関して、中濱東一郎との契約成立
- 9月14日 東大久保の敷地内に新校舎建築が開始される。
- 10月1日 前日夜半の暴風により、新校舎の骨組みが倒潰。
- 10月30日 高橋琢也は東京医学講習所において、全学生に新医学校舎設立のそれまでの経緯とこれからの方針とを説明した。
- 11月1日 学生団による本部会発足
- 12月10日～12月26日 上野日本美術協会（東京上野）において、絵画頒布会開始。
- 12月30日 中濱東一郎所有の回生病院購入代金すべて完済。

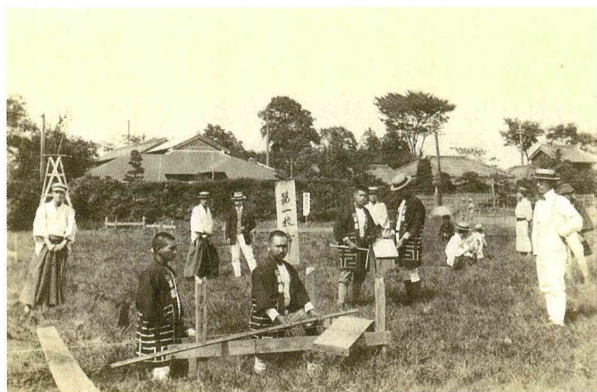
大正7年

- 1月4日～ 千葉、仙台、鎌倉、横須賀における絵画頒布活動（学生中心）
- 1月14日 東大久保敷地に建設中の新校舎において、東京医学講習所の始業式開催
- 2月14日 立教大学医学部設立構想は米国の寄付が集まらず、消滅。
- 2月17日～3月3日 上野都座における絵画頒布会
- 3月5日 文部大臣岡田良平宛の東京医学専門学校設立願いの提出
- 3月7日～3月22日 赤坂溜池町、三会堂において絵画頒布会開催
- 3月27日 東京医学講習所の学生達の徴兵制忌避問題が新聞に報道された。
- 4月1日 高橋琢也は陸軍大臣、憲兵隊分署を訪問し、学生達の徴兵忌避問題への善処を依頼した。
- 4月6日 高橋琢也は文部省を訪問した。そこで高橋琢也は決死の意思をもって岡田良平文部大臣に東京医学専門学校設立を直訴したと考えられる。
- 4月11日 文部省より東京医学専門学校認可の電話通知があった。
- 4月12日 文部省より正規の認可書が到達。
- 4月14日 東京医学専門学校設立祝賀会

高橋琢也は関西地方での募金活動を開始した。一方では、高橋琢也はこの年の春より新医学校のための敷地の購入を模索した。これには高橋の盟友、石黒忠恵男爵が協力を惜しまなかった。大正6年6月30日、石黒忠恵の斡旋により、東京府下豊多摩郡大久保町東大久保（現在の東京医科大学本部住所）に敷地（4,026坪；参考までに現在の東京医科大学本部の敷地面積は4,832坪となっている）を地主・中村久作より購入することとなった（写真1A、B）。写真1Aには東大久保の地における鋤入れに集った学生達の姿が写されている。故原三郎名誉教授によると、「大正六年六月十三日（三十日の間違いか。筆者註）、高橋氏は東大久保に四千二百六坪の学校建設用地を買収した。この買収費用は十万四千元で、内金として五千元を支払った。これが現在の東大久保の大学本部の敷地である。ここは当時の市ヶ谷監獄のすぐ上であって、その一部には同監獄の畑があり、時々赤衣および青衣の囚人が畑仕事をしていた。



A



B

写真1 A. 新大久保敷地の鋤入れに集う学生達（大正6年7月頃か）。B. 新大久保敷地の区分け作業

敷地の一隅に近く、一本の樹木があって、学生会本部員はそこに丈余の四角の木柱に「東京医学専門学校建設用地」と書いたものを立て、これを囲んで盛んな歓喜の声をあげた。」という（東京医科大学五十年史¹¹⁾。高橋琢也日記¹⁶⁾（写真2）には、内金を支払ったのは6月30日と7月31日と記載されている。敷地の購入代金は104,000円であった。内金として5,000円（現在の5,000万円相当）が中村久作に渡された。高橋琢也日記¹⁶⁾には次のように記載されている。

[契約の条件]

一. 拾万四千元 大正六年六月三十日二千元、同七月三十一日三千元入金、同七八九三ヵ月無利息。十、十一、十二、七年一、二、三まで六ヵ月銀行預金利子格相当の利払の為に尚お数月の延期を為す場合には年七分の利子を支う予約。七年三月末日までには少なくとも五万円を入金すること。七年七月末日までには全額納金すること。

一. 契約済の上は諸建物の設備を承諾すること。さらに高橋琢也日記¹⁶⁾には断片的であるが、支払い状況と支払い予定が記されてある。

●大正六年十月三日、参千円鈴木久作に渡す。内金三百円と七千元入金す。十二月二十八日、九千三百円渡す。残金八万円也（十、十一、十二の三月分利子九百円）

●七年三月末、九万九千円支払（内、九千円は北海道地の借入金を入れ、九万円は年七分にて土地担保借入（註：これは予定であった。実際は大正7年4月に国光生命より借入され、それをもって中村久作への支払いを済ませた。)) 此金利六千三百円、内二千二百坪を学校病院用とし、残に千坪を五万円に売却（実際は購入した4,026坪のうち、1,000坪を貸地とした）。

上記のように高橋琢也は東大久保の敷地を担保に大正7年4月2日に国光生命より75,000円の借款を受け、地主の中村久作に残金が支払われた（大正7年4月30日、高橋琢也日記¹⁶⁾）。国光生命社長は島津健之助男爵、副社長は佐竹義立男爵であり、高橋琢也と懇意であった両氏の好意により借款がスムーズになされたようである（東京医科大学五十年史¹¹⁾）。高橋琢也は当初、敷地代金、建築費代金、備品等に対する全体の予算を20万円と見積っていた。しかしながら文部省はその金額では承諾せず、最終的に

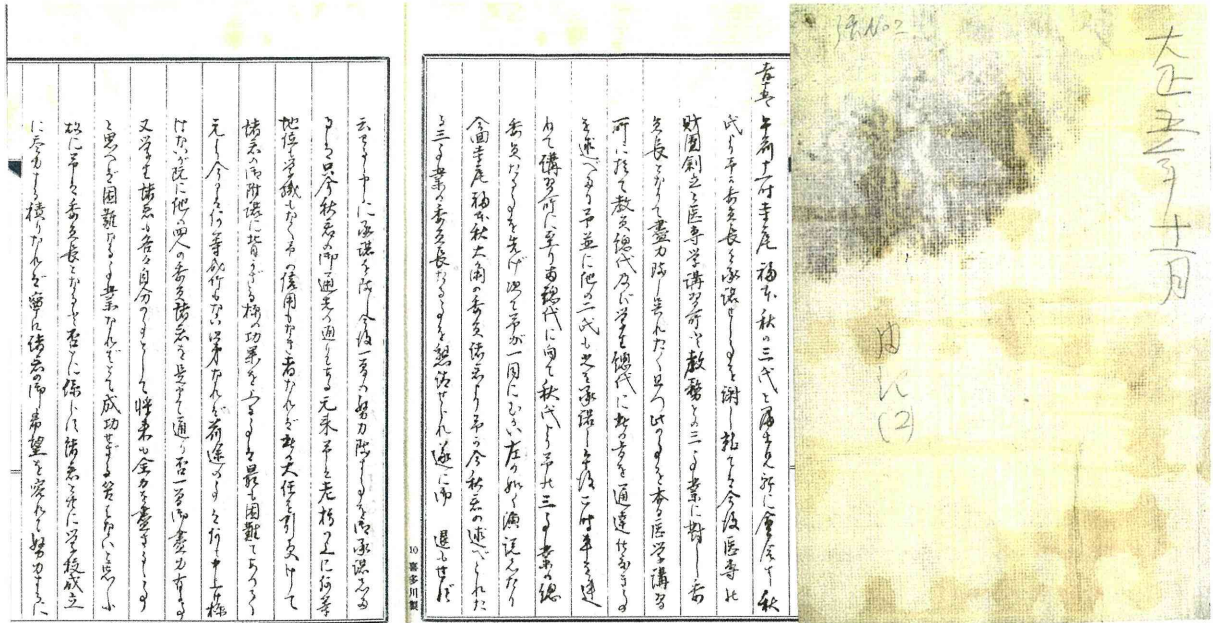


写真2 高橋琢也日記（表紙と第一ページ）

は35万円となった（大正7年3月に最終的な認可願いを文部大臣岡田良平宛に提出）。

新校舎の建築はその年の9月より開始された。敷地内には校舎と病院の建物を並立して建てる予定であった。校舎用の建築材は高橋琢也がかつて在籍した農商務省山林局より安価に譲り受けたものであり、敷地内に山積されていた（写真3の建築現場の木材）。校舎建築の請負者は平栗組であった。敷金1,020円を棟梁の平栗に手渡して建築工事が開始された。東大久保の新校舎の骨組みがその年の9月末には出来上がり、その棟上式が10月1日に行われる予定であった。しかしながら、9月30日夜来の暴風雨により建物は倒壊してしまった。高橋琢也は見舞客に「今も請負師が真っ青になって訴えて来た

が、苟も我輩の目の黒い裡は憂うるに足らん。気の弱い事を言うなど申して帰せし処なり。」と書いて、建築の続行を決意した（有吉鴨外談¹⁷⁾）。しかしながら、このような建物倒壊によって高橋琢也は当初描いていた資金調達計画を大幅に見直さなければならなくなった。それまでは高橋琢也は募金活動と絵画頒布会により学校設立資金を得ることを考えていたが、校舎倒壊により資金計画が逼迫することになり、そこにおいて高橋琢也は所有する絵画骨董品すべてを売却することを決心した。また、高橋琢也は広大な麴町の敷地と家屋を売り払い、四谷の小さな貸家に移転し、一方では所有する青森や北海道の山林の売却を決意した。転居先の家は学生団の学生が探し求めた。9月30日夜より10月1日朝にかけての暴風雨による建物の倒壊については高橋琢也は「十月一日 午前一時より大暴風雨。草木は根こそぎになり、かわら落ち、門へい皆たがれ、僅か三、四時間の内に見るも無残の有様となりたり。八時より自動車にて高橋光威、品川銀行、井上（角五郎か）、川崎銀行、山本（条太郎か）。来人、学生拾五人程。平栗、鈴木半蔵。入金壹万円也、品川銀行より。」と日記¹⁶⁾に記載している。高橋琢也は平栗組への損害を補充するために早朝より品川銀行や川崎銀行に金策に行った。また、当時の東京日日新聞がその時の様子を生々しく伝えている。

東京日日新聞 大正6年12月10日

財を鬻（ひさ）いで学校建築費に十五万円を寄



写真3 新大久保敷地に積み上げられた木材と建築中の校舎

附す。日本医専に分立せる東京医専に在学せる同郷の学生を救わる為に奇特なる高橋琢也氏困惑を重ねつつある日本医専の退学生四百余名末梢の目的を収めて後援会を組織されしを当時報道せしが、その後大方の同情金を以って、府下大久保に東京医学専門学校ならびに附属病院を建築中なるも、三十余万円の寄附金の予定が漸く半なる十月（一日）の暴風雨のため、建築物に大損害をきたし、創立一層困難に陥りたるよし。協賛員中の麴町中六番町の高橋琢也氏は、北海道および青森の所有地数万坪を売却し為、秘蔵の書画骨董約二千五百余点を十一日より二十日まで売却を行い、四、五万前後の売却金を挙げて、創立費用に寄附することに決せりと。近頃の義挙というべし。これにつき高橋氏は語る、「私は元来同校には何も関係もなかったのですが、学生中に同郷広島県出身者が十、九名ばかりあるのと、気の毒な退学生諸氏に同情の余り片肌脱ぐ覚悟をしたのです。売却の美術品は全て正札付といたしました。自分はこのことには、素人であるから品物によっては価値以上の高値がついているものがあるかも知れませんが、それは気の毒な学校に寄附するというお考えで是非買っていただきたいと思えます。とにかく、私の今回の挙が動機となり同校に対する同情者が多くなれば幸甚の至りです」

このような困難な状況に耐えながら、高橋琢也は再度新校舎の建設を開始した。なお、高橋琢也は東大久保の敷地確保し新校舎建設中であることに踏まえて大正6年10月に岡田文部大臣に対して、財産

目録とともに東京医学専門学校承認願の仮案を提出した（写真4、提出日は入っていない）。しかしながら、文部省はこれに対して何ら回答することはなく、後述のように立教大学医学部設立構想を進めて行った。また、文部省・松浦専門学校局長は高橋琢也の提出した財産目録では金額（20万円）は不十分で、上積みしなければ承認しないことを述べた。高橋琢也日記¹⁶⁾では、

松浦局長曰く、「金利を以て学校を維持すべき。相当の維持金を見れば只寄附すると云うのみにては不可なり。日本医専に懲りたり」と。日本医専の不都合、不合格は局長の言に由りて明瞭なるのみならず満天下之を知る。而も四百五十名の退校生を如何にせんとする乎。

と記述されている（当時は私立の専門学校や大学は充分な金利が得られる資金を用意しておくことが文部省により推奨されていた）。東大久保の新校舎は大正7年1月に完成した。1月14日に、学生達は東京物理学校（牛込区神楽坂）より新校舎に移動して始業式が行われた。

高橋琢也は東大久保の敷地内に新校舎に加えて新病院を併設することを考えていたが、それは中濱東一郎所有の回生病院の買収と移築により具体化された（次章）。

3. 中濱回生病院購入と移築について

高橋琢也は東京医学講習所が立ち上げられたその年、大正5年12月5日に中濱東一郎と会談し、将来の医学校の病院として中濱所有の回生病院の移築を実現しようとした。高橋琢也日記¹⁶⁾には次のよ

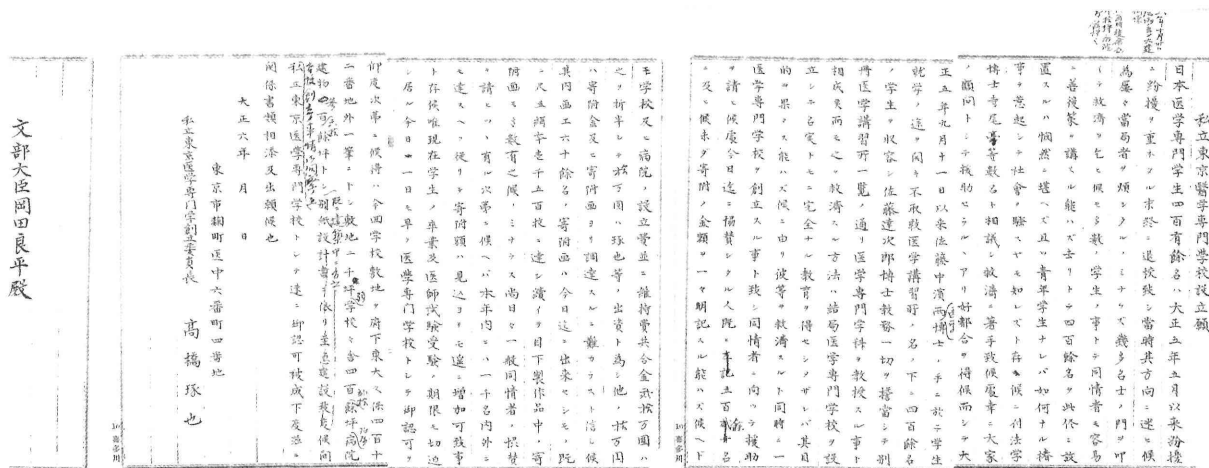


写真4 文部省提出書類

うに書かれてある。

高橋琢也日記・大正五年十二月三日 中濱東一郎
(歳暮味甘一箱)

大正五年十二月五日 夜中、中濱(東一郎)を訪
い、回生病院ゆづり受けの相談をなす。

この時点では、中濱東一郎は東京医学講習所顧問でもあり、回生病院の建物と備品とを無償で供与する心積りであった。高橋琢也も会談の前日にお歳暮として蜜柑を中濱に送っている。しかしながら、翌年には中濱東一郎の考えは一変し、他に購入したい人が出てきたとって回生病院とその備品の売却を主張し始めた。高橋琢也日記¹⁶⁾には「初め寄附と云い、一変して十二円坪売却と云、再変して二十五円坪と云い、石黒の仲介にて七千円と纏る。器械、附属も別に代価を払う。」と残されてある。中濱と高橋琢也との購入価格は中々折り合わず、石黒忠恵の仲介によって7,000円で回生病院建物購入が決定し(大正6年9月9日)、内金1,000円を中濱東一郎に支払った。最終的にはその年の12月31日に代金完済となり、回生病院の購入が成立した。その経緯は中濱東一郎日記¹⁸⁾や高橋琢也日記¹⁶⁾に残っている。異なる立場から記載されているが、内容は一致する。

中濱東一郎日記¹⁸⁾には大正5年10月10日より大正7年1月18日まで、新医学校舎設立に関連する重要な記述が散見される。とくに下記のような大正5年10月10日の政変は東京医学専門学校設立の先行きを占う上で大きな事件であった。なぜなら、大隈政権下では文部大臣高田早苗(たかだ・さなえ)¹⁹⁾は東京医学専門学校の学生達に多大な同情を示しており、大隈重信(おおくま・しげのぶ)総理大臣²⁰⁾も佐藤進(東京医学講習所顧問)には大きな信頼を措いていたから、新医学校の承認は早いと考えられた。しかし、新総理大臣・寺内正毅(てらうち・まさたけ)²¹⁾が山根正次(やまね・まさつぐ)・日本医学専門学校理事長²²⁾と同郷であったことや、文部大臣に就任した岡田良平²³⁾はそれまでであった帝国大学令を改正して大学令を施行することを目指し、新規の医学専門学校の認可には消極的であったことは、高橋琢也の進める東京医学専門学校設立に不利な状況を醸していった。

中濱東一郎日記・大正五年十月十日 曇、時々小雨。昨日、大隈重信(侯爵)、石井菊次郎(子爵、外務大臣)、内務大臣(法博士)一木喜徳郎、大

蔵大臣武富時敏、司法大臣尾崎行雄、文部大臣(法博士)高田早苗、農商務大臣河野広中、逓信大臣箕浦勝人の八人依願免本官。新内閣左の通りにて本日親任式あり。

総理大臣	伯爵	寺内正毅
外務大臣	伯爵	寺内正毅
内務大臣	男爵	後藤新平
文部大臣		岡田良平
農商務大臣		仲小路廉
逓信大臣	男爵	田健次郎

陸海軍大臣大島(健二)、加藤(友三郎)の二人は留任。今回の内閣は所謂超然内閣にて短命なる可しとの説多し。

文部次官には田所美治(たどころ・よしはる)²⁴⁾が新しく赴任したが、高橋琢也とは懇意の間柄であった。しかしながら、文部省専門学校局長に松浦鎮次郎(まつうら・しげじろう)が留任し、高橋琢也へ敵対的に対峙していった。また、岡田文部大臣が設立した臨時教育会議²⁵⁾²⁶⁾の重要メンバーに学生達が総退学した日本医学専門学校の理事長・山根正次が入ったことは新医学校設立へ大きな障害となったことは想像に難くない。一方では、高橋琢也が長州藩重鎮・井上馨(いのうえ・かおる)や品川弥二郎(しながわ・やじろう)の庇護を受けていたことは長州出身の寺内正毅総理大臣への重しになっていたとも考えられる。高橋琢也は大正6年より7年にかけてしばしば寺内を訪問している。また、内務大臣後藤新平や陸軍大臣大島健二、海軍大臣加藤友三郎(かとう・ともさぶろう)が高橋琢也とは非常に親しい間柄であったことは東京医学専門学校設立促進に対して陰に陽に良い影響を及ぼした。中濱東一郎日記¹⁸⁾はさらに続く。

大正五年十月十三日 小雨。石黒忠恵氏に伊藤幹一氏養嗣子米国より帰朝したるに付、祝賀会の件を相談す。来る十七日富士見軒にて開くことに線とす。

高橋琢也が大正6年9月9日に回生病院売却の仲介として石黒忠恵を立てたことは中濱と石黒の上下関係を知った上でであった。さらに、中濱東一郎日記¹⁸⁾は翌年の8月に続く。

大正六年八月二十四日 晴。夕食後四谷の博士、佐藤達次郎氏を訪う。

大正六年九月四日 終日曇天。夜、竹内作次郎並に中浜秀俊（中濱東一郎の弟）来る。

午前高橋琢也氏を訪う。来十五日迄に回生病院売却に付、具体的に決定を迫り、坪二十五円、金を渡す月日、保証人を取極められたしと申込みたるに承諾し、且石黒君を仲介人と為す可しと云う。

大正六年九月九日（日曜日）細雨。去る6日、午前、石黒忠恵氏（男爵）来訪、高橋琢也氏の依頼を受けて来り。中浜は病院を八千円にて売却せんと云、高橋は六千円にて購はんと云う。依て七千円にしては如何と述べられたれば予は七千円にて可なりと述べ、若し則金にて仕払はざれば確實なる保証人を立つ可き事を約束したり。

九月十八日 晴。今午前、回生病院を七千円にて高橋琢也氏に売却することに約束し、手付金千円を受取る。

この日に高橋琢也と中濱東一郎との契約は成立した。

十二月二十日 晴。去る十二日より高橋琢也氏が所蔵骨董品約三千点を上野美術協会に於て展覽即売し其得金を東京医学専門学校設立の資金に提供すと云う。然し予が回生病院建物の代金七千円（内千円手付）は未だ皆済せず、又同院の備品機械等の代金八百円も違約して支払らわらず太だ不都合なり。

この日記の中で、中濱東一郎は高橋琢也が中々入金しないことに対して不満を述べている。中濱東一郎は東京医学講習所設立に至るまでは大きな支援を送っていたが、東京医学講習所の顧問となった以後は、非協力的になっていった。その経緯は後述する。

十二月二十八日 晴。寒気甚し。本日、日本倶楽部に午餐会あり、山根正次、政尾藤吉（法学博士）（以上米国より帰る）、日置益、内藤久寛（以上支那より帰朝）、予も出席。（筆者註：山根正次は日本医学専門学校理事長である）

十二月二十九日 晴。約の如く午前九時頃、番町の高橋琢也氏宅に行く。（中濱）秀俊同行。琢也氏は急用を以て外出仲なれども病院器機代金八百五十円余、小切手にて受取りたり。

十二月三十日（日曜日）晴。明日、回生病院建物の代金六千円（壹千円はさきに受取りたり）を領収する約束を為したれば代人として秀俊を遣

す事としたり。

十二月三十一日 晴。会社（日の出）に行きたるに秀俊より金六千円領収し終りたる旨を告ぐ。本年は還暦にして病院地所等希望通り売却し、大に安心し、先づ余に取りては多幸の年なり（限を知れば）。

この日に回生病院の購入は完済した。

一月十八日 晴。医学講習所の生徒二人来り、図画を売らんとす。予は鈴木孝之助、中村氏、逗子の鈴木湛氏に照会書を送る。両三日にて三十枚余りを売りたりとて学生は大悦なり。

一方、高橋琢也日記¹⁶⁾では次のように書かれてある。

高橋琢也日記・大正六年九月六日 中濱氏来訪、病院二十五円坪と云う。五日夕、予、石黒先生を訪い仲介を依頼す。六日朝石黒先生来訪。中濱と協定したる価格は七千円（病院全部）なりと云。予も快諾し、譲渡の約成立せり（最初寄附すると云うたるものなり、呵々）。次て金壹千円内金を入れて十二月末日残金を渡す約束なり。十月十七日後、解取移築の積なり。（呵々：全くおかしいや、という笑い。筆者註）

高橋琢也日記・大正六年十二月三十一日 中濱（弟、代人として来る）に六千円渡す。病院の器具器械も亦別に買取することとなれり。

中濱東一郎が新医学校設立に意欲が薄れていった大きな理由として新医学校の校長への就任を期待していたことが考えられる。一方、高橋琢也は順天堂医院の人材を中心に新医学校の設立を考えていた。順天堂医院院長であった佐藤達次郎が東京医学講習所校長となり、順天堂医院の医師達が新医学校の教授となるという高橋の構想は中濱東一郎の希望には沿えないものであったことは致し方ない。高橋琢也は中濱東一郎を名誉校長として在任してもらおう構想をもっていた（高橋琢也日記¹⁶⁾）。それは、大正5年9月11日の東京医学講習所設立に関しては中濱東一郎の大きな支援がなくてはならないものであり、その後も回生病院を内科学研修病院として提供していたからである。中濱東一郎は東京医学講習所設立の時点で、回生病院を無償提供することを高橋琢也に申出していた（上記の高橋琢也日記¹⁶⁾より、大正5年12月5日）が、高橋琢也が佐藤達次郎を

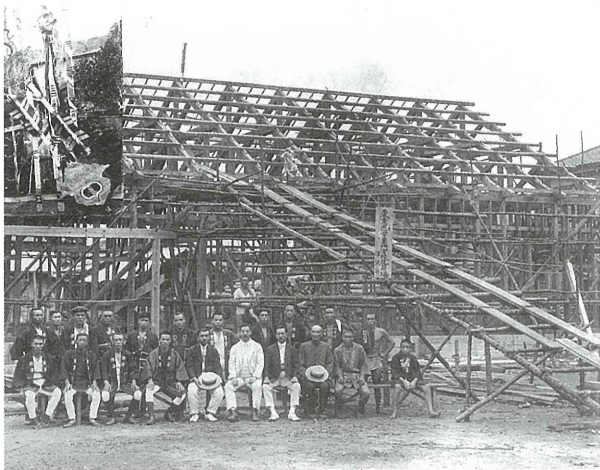
東京医学専門学校校長として決めたことから、気持ちがいささか離れてしまったようである。高橋琢也による名誉校長構想は中濱東一郎には伝えられなかったのではないかと推察される。中濱東一郎は最終的に大正6年12月31日に回生病院の売却という形をとってしまった。東京医科大学の開学の歴史の記述¹¹⁾の中に中濱東一郎博士の名前がほとんど見られないのはこのような経緯によるものであろう。長委三美が大正7年2月25日に中濱東一郎を訪れたのが学生達と中濱との最後の接触となったようである（本部会記録2月25日）。中濱東一郎を訪問した長委三美の報告⁶⁾として、『けさ中濱博士を訪問して面談す。要は先生の履歴書を得んが為めなり。然るに先生の曰く、「自分は是迄東医の教授、或は講師になりたる覚えなし。只顧問の名儀丈けは承認す。而して自分は是迄のけものにされ居れり。故に履歴書を出すは考えものなり。』と云わる。此事池上先生に復命せし処、先生は非常に熟図（うなず）かれて「そん

な冷淡な事を云うなら、顧問も取消して貰うよう、高橋先生に語らん。』と云われたり。』と書かれてある。中濱東一郎より購入された回生病院の建物は、大正7年5月までに東大久保の敷地に移築され（写真5A、B）、佐藤進男爵により博済病院と名づけられた。回生病院より移築された建物はその後焼失したが（昭和3年）、その門柱だけは現在の東京医科大学の正門に残っている。

4. 学生団の再結成と新医学校設立への関与

大正6年10月までの学生団団長は中村丈夫であったが、11月1日より後藤哲雄に交代した。その後の学生団（本部会と称した）の行動の記録が本部会記録として残されてある⁶⁾（写真6）。本部会記録は議事録として優れた体裁がとられており、記録内容は第一級である。高橋琢也日記¹⁶⁾と併読することにより、当時の逼迫した状況が浮かび上がってくる。本部会の発足時のメンバーは後藤哲雄（旧4年生）、中本富太郎（旧四年生）、青山豪一（旧四年生）、中村丈夫（四年生）、大沢龍雄（四年生）、鈴木達夫（旧四年生）、安部達人（路人）（四年生）、古川道之助（四年生）、小川東洋（四年生）、寺師（迫田）順一（三年生）、杉山泰治（三年生）、川目鉄太郎（三年生）、長委三美（二年生）、難波静夫（二年生）、佐々正蔵（二年生）、佐藤憲二郎（二年生）、江並猛（一年生）、荒瀬秀俊（一年生）らであった（学年は大正5年12月の時点。旧四年生とは日本医学専門学校で大正4年時の四年生を示す。）（写真7）。

団員達は徹底した調査を行い、秘密主義を貫徹した。会議は数日ごとに行なわれ、そこで調査内容が



A



B

写真5 博済病院の棟上（A）とそこに集う学生達（B）。

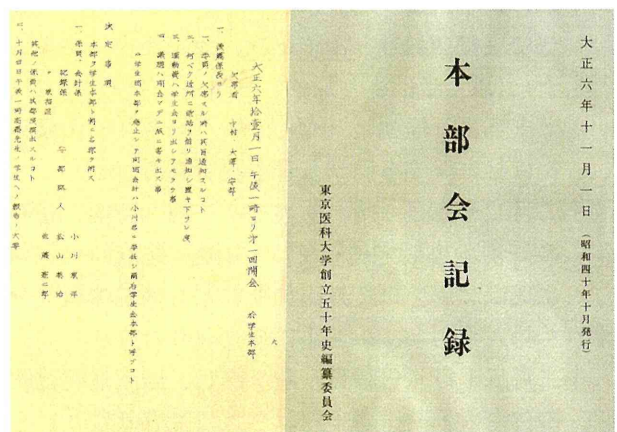


写真6 本部会記録（表紙と第一ページ）



写真7 本部会学生の集合写真（大正7年4月撮影） 下列左より、小川東洋、鈴木達夫、中本富太郎、後藤哲雄、中村丈夫、古川道之助、安部達人、中列左より難波静夫、川日謙太郎、佐藤憲二郎、寺師順一、荒瀬秀俊、上段左より江並猛、長委三美、杉山泰治、佐々正蔵、大沢龍雄、青山豪一

発表され、討議して次の行動に備えた。高橋琢也とは密に連絡をとるが（秘密会：高橋琢也と本部会学生達との会議のこと）、常に一步距離をおき、本部会の中では高橋琢也を老骨と呼ぶこともあった。本部会の学生団員達は、立教大学の元田作之進学長やトイスラー大学総理らと面会し、立教大学医学部設立構想の確認と進行状況を確認めたり、上野の絵画頒布会に協力し全国の頒布活動を直接行い、日本医学専門学校の内動向を調査し、さらには文部省、東京府庁にまで調査に行くなど、新医学校設立に向けた独自の関わりを続けていった。その行動は大正7年4月11日に文部省より東京医学専門学校が認可されるまで継続的に行われたのである。本部会記録⁶の冒頭は11月1日より始まっている。

本部会記録・大正六年十一月一日 午後一時より
第一回開会 於学生本部

欠席者 中村（丈夫）、大澤（龍雄）、安部（路人）

一、後藤（哲雄）係長より

- 一、委員の欠席するときは其旨通知すること
 - 二、何べく近所に電話を借り通知し置き下され度
 - 三、運動費は学生会より出してもらう事
 - 四、議題は開会までに紙に書き出す事
- △学生団本部を廃止して同団会計は小川（東洋）君に委任し爾后学生会本部と呼ぶこと

決定事項

本部を学生本部と將に名称を付す

- 一、係員：会計係、小川東洋 記録係、安部路人、杉山泰治 記録係兼宿直 佐藤憲二郎 其他の委員は其都度選出すること
- 二、十月三十日午後一時高橋先生の学生への報告の概要
 - 一、所有財産 北海道旭川、室蘭等予定価約十万円
 - 二、書画 骨董品約三千点 一品二五円として 五万円
 - 三、絵画今日出来上りたるもの千八百枚
 - 四、寄付金の件
 - 五、敷地、校舎及病院移転の件
 - 六、秘密会
- 三、高橋（琢也）先生に本部会員報告並に学校の現在及び将来に関して先生の意見を伺う事 委員：後藤、古川、杉山、佐藤、江並
- 四、学生に報告の事項（各級に於てすること）
 - 一、授業料納付の事
 - 二、欠席遅刻の件
 - 三、風儀
 - （一）校内、順天堂に於て礼儀を守り正服着用の事
 - （二）諸教授に礼儀を守る事
 - （三）学生相互に礼を交換すること
 - （四）高橋先生に何べく個人訪問殊に手紙は出さざること
 - （五）学校の事に関しては私語せず公式に申し出ること
 - （六）何べく日本医専学生と交通せざること
- 五、新築校舎調査の件
- 六、絵画会に関する件

大正6年11月1日午後、高橋琢也との会見の結果報告、上野での絵画会の件、学生達的意思統一を図るための方法などが本部会の学生達によって話し合われた。前日の10月30日に、高橋琢也は東京医学講習所において全学生の前で、新医学校設立にむけた説明会を行っている。そこでは、10月1日の

新校舎の倒潰、文部省による立教大学医学部設立構想問題や今後の方針などが詳しく語られた⁶⁾(その内容については次号に詳しく述べる)。高橋琢也の話聞いた学生達の危機感によって本部会が再結成され、新医学校設立に向けた関わりが始っていった。本部会の学生達が高橋琢也と密接に連絡をとりつつあることがこの日の記録⁶⁾より明らかである。この学生団学生による本部会においては同志的団結で会議がなされた。団員達は高橋琢也に対しても対等に交渉し、新医学校設立あるいは立教大学医学部設立構想(次号に詳述)に積極的に関与していった。学生達の深入りに対して高橋琢也はその行動力は認めながらも、「君等が文部省に行って取審べていけないとは云わぬが、兎角私を信用せぬようにも受取られるから見合わしたら良からう。君等が行ったために認可が遅れるような事あっても知らんぞ。」⁶⁾と、懸念するほどであった。第2回の本部会会議は大正6年11月4日に行われ、次のように記録されてある。

第二回本部会議 大正六年十一月四日 午後六時
より学生会本部(信陽館)に於て第二回本部会議開催

一. 報告事項

A. 高橋先生訪問顛末(後藤、杉山、佐多)

1. 病院の件、病院は鈴木某に請負わしむ。第一、第二校舎は平栗にて、請負人は別にしたるは工事進捗に便なる為なり。両請負人の間に衝突ある時は警察に委任すべし。病院竣工は八月中。病院引渡し(筆者註:中濱回生病院のこと)遅延は初めは無条件なりしものが他に希望者生じたるため漸次金の必要を増し現在は普通より稍高き観ありと。
2. 敷地の件敷地には五千円を入れたり。尚今年中に十万五千円を入るるを要する為大に困却す。

中濱東一郎所有の回生病院の委譲については、同年9月に契約がなされ、移転業者は鈴木岩造と決定したことが高橋琢也から後藤哲雄ら学生団学生に伝えられた。また、新校舎建設業者は平栗(工事請負人)に決まった。東大久保の校舎敷地は既に中村久作(地主)より売約の契約がなされ、5,000円の内金が支払われていた。

3. 北海道土地の件、交渉未定(筆者註:

高橋琢也所有の土地の売却の件)

高橋琢也は9月30日の校舎建物の倒壊により、自己所有の北海道の土地と絵画骨董の売却を決心した。

4. 絵画骨董品の件 △その時趣意書は都下の名家、学生父兄、学校等に頒布す。半分売るるも充分なり。残りは名古屋地方にて再び展覧会をなす。両者二千点を来春三月上野美術倶楽部にて展覧会に付す。

△池上先生及竹下氏主唱の絵画十円売捌案は中止を可とす。一枚少なくとも二十五円ならざれば廃売品に対して調和せず。画家にはすべて現金で払えり。東北地方の絵の収入も入り、沖縄のものは船中にて売切となれり。

5. 認可申請の件(筆者註:認可申請は既にこの年の10月に仮書類として文部省に提出されていた。)

6. 秘密会の件(先生は文部省との交渉顛末を記載せる書類を読み上げたり。然して要するに先生は独立振興を経営するよりも合併案に傾けるが如し)。外人出資額は二百五十万円にして元田作之進氏(立教大学校長)²⁷⁾が関直彦氏を介して文部省に申込みしものなり。以前の立教大学合併問題とは全々別なり。されど東医、日医、立教にとりては好都合なり。外人の関係者はセーヤ、マキーム(トイスラーにあらず)なり。国際病院との関係は今言明を避く可し。本件は金子(堅太郎)氏²⁸⁾に問合せしに確實なりと答えあり。文部省よりも本件の為め東医の事業中止を申込みたり。本件が成立するとせば日本医専にはただ金を与えざる可からず。自分は顧問に推薦せらるれば承知せざる事もなかるべし。現在本校は日医よりよき位置にあり。されど本問題には難関あり。

自分は本問題は別として自己の計画は飽く迄実行すべしと申入れたるに文部次官は諒とし局長は喜ぶ風を見ず。米国よりの返答は十一月六日には日本

に着す。されど発表期日は不明なり。

備考 マキーム キリスト教監督官
セーヤ 資産家

高橋琢也は、既に本部会学生に立教大学医学部設立構想の話が文部省より提案されていたことを伝えていた。しかしながら、上記のように学生団の学生達は高橋琢也が新医学校設立を目指しているのではなく、立教大学医学部構想に傾斜していると誤解していた。一方では、学生達はそれに関する調査を独自に始めていた。

B. 意見交換

1. 古川君—トイスラー会見当時の参考談
2. 佐多君—日本医専にては卒業生のみを会合し、秘密会を行い席上磯部氏演説に曰、今后磯部、山根は退き、学生は新校に移さる可し。諸君は団結し一人にても多く学生を勧誘せよ。と磯部氏は日々二人引きにて奔走せり。

1. 難関の推測

1. 教授に対するもの
2. 学生に対するもの
3. 佐藤、中濱両氏 クリスチャン
4. 中村君—学生団結の要

中濱東一郎が諸々の難色を示していることを学生達は既に知っていた。

5. 中本君—学校設立計画の具体的発表を高橋先生に依頼すべし。たとえ合併問題が起るとしても、もし此方に具体的建実なる案があれば交渉上に於て将に有利なるべし。吾人は此上何年も不安の此上何年も不安の中に過す事は不可能なるべし。
6. 中村君—池上先生の調査によれば高橋先生は未だ自己の金は余り使用せざる如しと。
7. 秘密会の発表は支部局長の許可を経て行いたるものなり。

学生達が高橋琢也と一体となって新医学校設立に向けて動いていったことは以上の議事録からも明らかである。

8. もし合併が事実とすれば敷地は府下池袋の約一万三千坪なる立教大学の地なるべし。
9. 日本医専使用説 立教大学使用説
○希望条項 日本医専学生数調査

C. 決議事項

1. 秘密会案はなきものとして従前の方針を一層積極的に実行する様、高橋先生を鞭撻する事。学生としても絵画の方面にて積極的に援助する事。
2. 秘密会案の調査をなす事
3. 学生統一
4. 本部会議の事項は本部として発表迄秘密に付する事

D. 委員：調査委員 青山、古川、安部、佐多

絵画交渉委員 中本、鈴木、山本、江並

学生統一は要するに各級統一なれば各級委員に一任す。

E. 次回集合日は本部より通知す。

閉会九時半

以上の第二回本部会記録にはさまざまな重要な案件が含まれている。学生達の徹底した調査と諸案件への密接な関与が伺われる。本部会では東大久保における新校舎と病院建物の件や絵画頒布会の件などについて具体的な検討がなされていた。また、立教大学の医学部設立構想が高橋琢也に伝えられ、それが具体的に動き出していた。また、学生団もそれに対応しようとしていた。学生団は独自に調査を行い、高橋琢也の活動の多くを秘密会を通して把握していた。本部会記録はこのような学生団学生の日々の活動を余すところなく記述しており、大正7年4月11日までその記載は継続された。

次章には高橋琢也と学生達が学校設立資金調達のために開催した上野・日本美術協会（大正6年12月10日より25日まで）、上野・都座（大正7年2月17日より3月3日）、三会堂（大正7年3月7日より3月22日）に於ける絵画頒布会の様子や地方頒布会（関東、東北、名古屋）などの様子を高橋琢也日記¹⁶⁾と本部会記録⁶⁾に基づいて詳述する。

5. 上野・日本美術協会における絵画頒布会

絵画頒布会を開催して学校設立資金を得るという高橋琢也の構想は既に大正5年12月に具体化されつつあった。高橋琢也は明治30年に農商務省山林局・局長を非職となってより、浪人時代を長く過ごす中、この間数多くの書画骨董を収集した。高橋琢也と



A

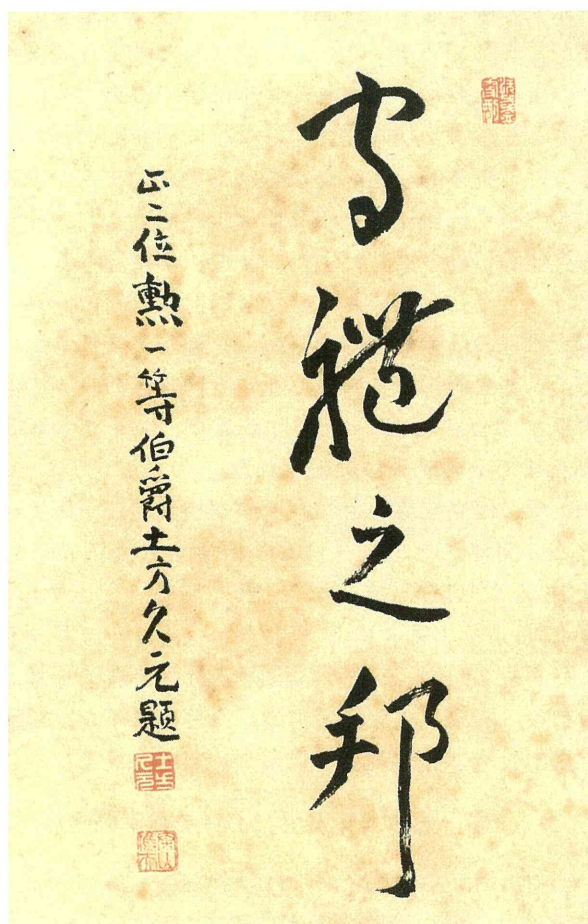


写真8 (A) 土方久元肖像、(B) 土方久元の書(高橋琢也著「起て、沖繩男児」に寄せた巻頭言「守礼之邦」)

日本美術協会会頭の土方久元伯爵(写真8A、B)²⁹⁾とは高橋が明治18年に農商務省に職を得て以来の知己であり、入魂の間柄であった。本章で述べる上野・日本美術協会での絵画骨董頒布会の遂行には土方伯爵の支援なしでは行なえなかった。日本美術協会は明治12年に佐野常民らが主宰した龍池会を前身とし、日本画家達の協会としてはわが国最大のものであった。また、帝室博物館館長・股野琢(日本美術協会副会頭)や高名な日本画家・高島北海(写真9A-D)(文展審査員)は高橋の農商務省以来の同僚であり、交遊を深めていた。高島北海と高橋琢也は、長く長州藩領袖・井上馨の庇護にあったことから、井上馨の排除を目指した大隈重信によって明治30年に農商務省を非職とされてしまい、二人とも下野していた。その後、高島北海は日本画家を目指し、大正5年には日本画画壇における重鎮となっていた。高島北海は高橋琢也の近くに居を構えていたので、二人の親しい交流は想像に難くない。また、高橋琢也は麹町の自宅を日本画家・池田輝芳、蕉園夫妻に提供していたこともあった。このように高橋琢也は明治30年より大正5年までの間に日本美術界においても隠然たる影響力を持つようになっていた。

高橋琢也は新進気鋭の日本画家達に依頼して廉価で揮毫してもらい、それを頒布することにより新医学校のための資金調達するというアイデアを具体化していった。まず、大正5年11月22日には、農商務省山林局でかつて高橋琢也と高島北海の上司であった武井守正(写真10)を訪問している。高橋琢也日記には「書画壺千枚 末松(謙澄)(子爵)、金子(堅太郎)(子爵)、武井(守正)(男爵)、土方(久元)(伯爵)、谷森(真男)(男爵)の手の画工に依頼」と書かれてあるので、武井守正達から多くの画家を紹介してもらったと推測される。武井守正や谷森真男は、明治時代に日本美術協会副会頭を務めていた。

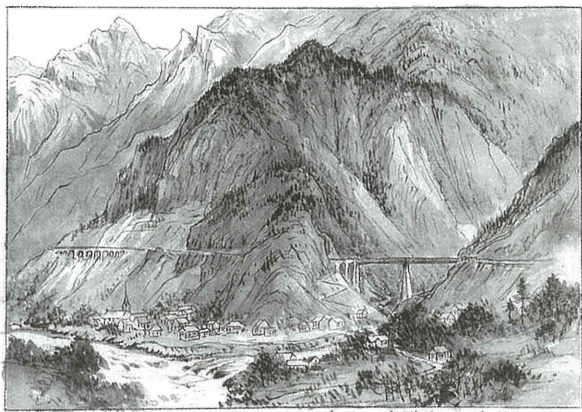
また、「金子に乞うて、美術学校長に依頼し、教師、生徒等の助力を乞う。京都は大家及美術学校に乞うこと同様。書面を各知事に送り、協賛を求むること。」とも記述されている。金子とは金子堅太郎子爵²⁸⁾(写真11)のことであり、農商務省山林局における高橋琢也の上司(農商務省次官)であった。明治30年に高橋琢也、金子堅太郎、榎本武揚(農商務大臣)らはわが国初の「森林法」制定を成し遂げた。高橋



A



B



C



D

写真9 (A) 高島（得三）北海肖像。(B) 高島北海のレリーフ（フランス・ナンシー森林学校留学時代。ナンシー美術館所蔵）。(C) 北海筆の日本画 (D) フランス・バラ雑誌に掲載された北海の日本画。高島北海（1850～1931）は長州萩藩出身で、明治5年（1872年）に工部省鉾山寮出仕となり、フランス人コワニエについてフランス語と地質学を学んだ。その後、内務省地理局測量課に入り、明治14年に農商務省山林局に出仕した。明治18年に山林局長・武井守正とともにヨーロッパに出張し、ついでフランス・ナンシー高等森林学校に留学した。そこでアールヌーボー巨匠・エミール・ガレ（Emil Gallé）と親しくなった。日本美術を紹介しガレとその仲間達に大きな影響を与えた。現在では藤田嗣治とともに、フランス美術界では大きく評価されている。高橋琢也も明治18年に農商務省山林局に出仕し、武井守正の配下となり、武井守正や高嶋北海とはそれ以来の知己である。

琢也はしばしば金子堅太郎を訪問しているが、金子より日本画家を紹介してもらうとともに、美術学校の紹介を受けたようである。

翌日、高橋琢也は高島北海を訪問したが、大正6年1月の伊香保温泉における寄付画揮毫会の件やそ

の年の絵画頒布会開催について相談がなされたと考えられる。さらに高名な日本画家芝景川を訪問した。また、高橋琢也は配下の鈴木半蔵（東京医学講習所事務担当）を呼んで寄附画運動の具体的な相談を行なうとともに協力を要請した。これらの話は以下の



写真 10 武井守正肖像 武井守正（1842-1926）は我国の森林制度の確立者。農商務省山林局局长を務めたのち、明治20年に辞任。貴族院議員となり、高橋琢也が国会に提出した明治30年の森林法の制定に尽力した。日本美術協会副会頭を務めた。高橋琢也とは入魂の間柄であった。



写真 11 金子堅太郎肖像

高橋琢也日記¹⁶⁾より類推することが出来る。

高橋琢也日記 大正五年十一月二十二日 午前中、武井守正、谷森真男、井上角五郎、金子堅太郎の四氏を訪い、協賛員の署名を受く。夜分、中村（丈夫）、長（委三美）の両学生来る。

十一月二十三日 中村元嘉、土井順之助、呉文聰、田村貞馬、堀内慶一の署名を受く。

十一月二十四日 午前、車にて訪問。高島北海、岡田治衛武、岩崎勲、原敬、有賀長文、牧田環、山田直也、田中文蔵の諸氏署名を受く。（高島北海、一日の寄付画を承諾す。（筆者註：一日の寄付画とは、大正6年1月4日の伊香保温泉における日本画家による揮毫会のことを示す。）。

高橋琢也は農商務省時代の部下であり親友であった日本画家・高島北海に絵画販売会の構想を打ち明け、協力を要請した。それに対して、高島北海は全面的に協力することを約束した。

十一月二十五日 芝景川を訪うて寄付画を依頼し、和田維四郎を訪う。不在。学生、長（委三美）、中村丈夫来談。

芝景川は高名な日本画家であり、和田維四郎（八幡製鉄所長、日本美術協会実行委員）は高橋や高島北海の同僚で親しい間柄であった。この日、東京医学講習所学生、長委三美と中村丈夫が高橋琢也を訪問している。絵画頒布会の相談がなされたのであろうか。

十一月二十六日 午前中、土方（久元）、大谷（靖）、村上（敬次郎）、田口（謙吉）の四氏を訪い署名を受く。木村（喬）訪う。不在。来訪、甲賀宣政、署名を受く。清水医学士来談。鈴木半蔵来訪（寄付画運動上、打合せの為め）（寄附金の件）。

十二月七日 医学生二人。鈴木半蔵、画工依頼の打合をなす。

十二月八日 清水医学士、鈴木半蔵、画工に関する報告の為め来る。

十二月十一日 午後、鈴木半蔵来訪。寄付画の協議をなす。

十二月二十五日 寄付画募集の事に付き鈴木（半蔵）来談。

十二月二十六日 恒藤（規隆）、山田、寺崎、山形、鳩山（和夫）諸氏を訪ひ寄付画を依頼す。

十二月二十七日 土方（久元）を訪い顧問を依頼し、快諾せらる。（絹地、尺三、三疋四十円五十銭支払う）

高橋琢也は土方久元伯爵に東京医学講習所顧問を引

き受けるよう依頼したが、土方伯爵はその場で快諾した。東京医学講習所設立時は森鷗外が顧問であったが、その後顧問を辞退したことから、文部省に対して補充の報告が必要であった。

十二月二十八日 寺内（正毅）、高島（北海）、大谷（靖）、後藤（新平）を訪う。鈴木半蔵、寄付画の事につき来談。画工十五名の寄付画の謝金を渡す（絹地十五疋買入れ代金支払う。二百四十銭也）

高橋琢也はこの日に寺内総理大臣を訪問し、新医学校設立に向けた請願を行なったと考えられる。以降、寺内総理大臣を何度も訪問している。また、高島北海を訪問し、翌年1月の伊香保における絵画揮毫会の件を相談し、鈴木半蔵とは絵画会への具体的な段取りを相談している。

十二月三十日 団（琢磨）、三井（合名会社）、有賀（長文）、西園寺（公望）、秋元（興朝）、武井（守正）、岡（喜七郎）、浅野家を訪い、飯田の署名を受け、武田、嶋崎（柳嶋）を訪い、寄付画を依頼し、鈴木半蔵に寄付画の件につき来談。医学生来る。

大正六年一月お目出度始 一月四日 上野伊香保温泉に於て画工諸氏をあつめ寄付画を書かす。会費（壹百六円也）。壹百円高島北海に渡す。この日、高橋琢也は予定通り、群馬県（上野（こうずけ）の国）伊香保温泉において多くの新進気鋭の日本画家に集合してもらい、絵画を書いてもらっている。この企画は高橋と高島北海の協力により推進された。伊香保温泉は当時は温泉場として我国有数であり、活況であった。

一月十一日 早朝より、田中（頼璋）、佐藤（紫煙）、野沢、小林（呉橋）、松本（徹巖）、池上、小坂、諸画工氏を訪う。（渡謝礼。金百円也。田中頼璋）

一月十二日 夕四時より芝紅葉館へ望む。大谷伯の署名を受く。股野（琢）（帝室博物館館長）より（芝）景川、（竹内）西鳳の紹介をもらう。

一月十六日 入（売、奥山へ佐藤紫煙 揮毫画二枚五十円也）出絹地六疋払、九十六円也。

一月二十八日 鈴木半蔵来談。画会の準備、又は学校敷地に付協議。

二月二日 鈴木へ画料、小切手式拾貳枚渡す。二度分十六枚分小切手渡す。

十四日 鈴木半蔵来談。画工招待諸入費及手当百八十円也、小切手を渡す。

二十六日 （川合）玉堂、石黒（忠憲）、藤井（尾形）月耕、若宮（正音）、松平（乗承）伯、林権介、下田歌子を訪う。下田、月耕の署名を受く。（絹代、半沢払渡、五百参拾七円）。鈴木来談。

川井玉堂は我国を代表する日本画家であり、下田歌子は有名な歌人であった。高橋琢也がこの時期、絵画頒布会に寄せる期待は大きく、連日精力的に日本画家を訪問している。

二十七日 川合玉堂、尚家、酒井忠道を訪う。鈴木半蔵来談。

三月十九日 治章、（芝）景川、鈴木（雨溪）、（田村）石堤、（佐藤）寛城、（中嶋）光村、（海野）梅城、（佐藤）柳泉一円金計。メ百九十七円、梅城参拾五円、治章二五円、景川六十円、石堤二十円、光村二十五円、寛城十五円、柳泉十五円。十一月二十日より二月十七日まで八十日間（絵画頒布会のこと。あくまで予定であった。実際には会が頒布会はその年の12月10日より12月26日まで開催された。）

半年後、高橋琢也は予定通り東京上野の日本美術協会において書画骨董頒布会を開催した。

（大正六年）十二月十日より 上野美術協会に於て、書画骨董を展覧会。二十日まで、毎日朝八時より出張なす。毎百十五円也、十一日分売上金。七百貳拾六円五十九銭、十二日売上金。七十二円

この日より上野美術協会における絵画頒布会が開催された。この頒布会は鈴木半蔵の管轄のもと行なわれ、学生団の学生達も絵画の運搬や会場整理などに協力した。高橋琢也日記¹⁶⁾には毎日の売上金が克明に記載されてある。

十四日 入六百六円九十九銭、売上金高

十五日 入三百七十七円。一円八十銭売上金。

十六日 朝、理髪なす。入二百七十円七銭売上金十円会計渡。一円八十銭也。

十七日 入壹百九拾参円也 売上代。一円也会計。

十九日 入貳百九円也、売上金。

二十日 入参百五拾七円也売上金。

二十一日 学生画を取来る。参百八拾八枚。神谷。
入五百七拾円六十銭売上金。
二十三日 入百九十八円也、売上金。
二十四日 入貳参円也、売上金。
二十六日 今日は上野美術協会内。展覧会終了の
日なり。入貳千六百参拾五円也。

絵画頒布会はこの日まで延長して行なわれた。最初
は不入りであったが徐々に盛況となつていった。

二十七日 道具、荷馬車にて運搬なす。
この日は会場の撤収がなされた。

大正七年一月六日 医学生二人。学生、画貳
百七十三枚渡す。

この日より全国（関東、東北、名古屋）での絵画頒
布が開始された。この活動は高橋琢也と学生団の学
生達の共同作業で行なわれた。

九日 入十八円也、絵の金四百枚の内。

十六日 来人、加勢、学生三人、絵画参拾七枚渡
す。

二十四日 来人、医学生二人、鈴木半藏。早乙女
年始来る。種、混合絵画貳百参枚渡す。下田歌
子書二枚。

二十七日 日曜日なり。山本、元田、日昇館、岡
喜七郎、田中頼章、池上秀畝、神田倶楽部、上
野精養軒。

三十一日 朝より佐藤、山科、小明館、橋本新次
郎。午後より繁盛館を訪う。来人、田沢、池上。
医学生二人、田中頼章、秀畝の半切を加えるこ
と。

二月四日 絵画、(佐久間)鉄園、松陵、(佐藤)
松華、(佐藤)柳泉外六枚。

七日 横井維吉よりの寄附金として(柳泉、梅城、
松峯)六枚代。杉野喜精より(壹百円也)入金。

十三日 入絵画売代七百六十七円九十三銭、千葉、
仙台、鎌倉以外の分。

十七日 松原、竹下。夜に至り医生七人。絵画の
事にて報告に来る。金四千七百六十四円

十八日 第一回 絵画売上の分、入拾六円。入
十六円也、道具売上金。

十八日 入八円也売上代。入四十円也(五十円売
上代、内十円返し、高崎親章)。金五千壹百貳
拾六円也。

二十四日 学生掛物取り来る。十一時頃お出かけ。

留守中学生絵画取り来る(参十枚)渡す。

二十五日 朝より上野へ。夕帰り。留守中、学生
絵をとり、かえし。

二十七日 (沖縄より絵画売代金八〇六円四十五
銭入、四十二枚代)。

三月十日 千三百円也品物売代。四十円也画北海。
百円也別に品代。メ千六百円也。

十六日 自動車にて山科(礼蔵)、百貳点書画道
具△△、入千円の寄附を受く。

十八日 医学生佐々木持行きし絵画を学生会の部
へ廻す事申し来れり。夜に至り、後藤(哲雄)
はじめ生徒六人ばかり来る。阿部△五八より礼
幌の分、絵画の代金。

二十日 夜に至り学生絵画とり来る。大勢。

翌日の三会堂での絵画会の絵画の運搬のために学生
達が大量訪れた。学生達の協力ぶりが描かれてある。

二十一日 朝より三会堂。来人なし。医生、画の
△△△取来。入 絵画九十四本売れ、八百円也。
学生会。夜分、残の画を持来る。

二十三日 好天気。荷物のかたづけ。学生大量手
伝に来る。

二十四日 天気好し。外室なし。来人、学生二人、
北海とりかえしに来る。

書画骨董品：約三千点 一品二五円と
して五万円

絵画：今日出来上りたるもの千八百枚

一方、学生達は大正6年11月以来、学生団を組
織し本部会と称した。本部会の学生達の日々の活動
は本部会記録⁶⁾として残っている。その中にも学生
達が絵画頒布会に積極的に関わっていった様子が以
下のように詳しく記述されている。これらは日程的
には上記の高橋琢也日記の内容と重複するが、さら
に詳細に記述されてあるのですべて掲載する。

第二回本部会議 大正六年十一月四日 午後六時
より学生会本部(信陽館)に於て第二回絵画骨
董の件

△両者二千点を来春三月上野美術倶楽部にて
展覧会に付す。その時趣意書は都下の名下、
学生父兄、学校等に頒布す。半分売るるも
充分なり。残りは名古屋地方にて再び展覧
会をなす。

△池上先生及竹下氏主唱の絵画十円捌案は中

止を可とす。一枚少なくとも二十五円ならざれば廃売品に対して調和せず。画家にはすべて現金で払えり。東北地方の絵の収入も入り、沖縄のものは船中にて売切となれり。（筆者註：この時期より絵画頒布を学生達は東北地方で行なっていた。）

絵画交渉委員 中本、鈴木、山本、江並

第三回本部会議 大正六年十一月十日 午後一時半 開会

絵画交渉委員報告（中本）

- a. 池上（作三）先生曰く、絵画会の事に付き、清水（茂松）、田沢（鐮二）両先生とも協議したれども意見の相違あり。且、高橋先生に相談せしに、先生はこの学生教授連合の画会が自己の画会の妨害にはならざるやの懸念と、及び之まで絵画一枚を地方にては二十五円に売りたるを以て、今東京にて十円にて売るのは心苦しき事を以て賛せざりき。又該画会の売上金の事にも疑義あるが如くなりしか。それは当然純益全部高橋先生の手に入ると説明し感情融合したり。高橋先生の画会は一〇三〇円として、代議士上京の期に際し面会し、その時は学生の援助を行うことあるべしと。されば一時此方の画会は中止すべし。
- b. 鈴木半蔵氏曰く（鈴木達夫報告）昨日迄の一週間に画は新に三百十六枚出来た。故に画会にはいつにても間に合う。

第十二回本部会 大正六年十二月二日 午後一時半開

（高橋琢也談）

「骨董は来月、美術倶楽部にて売り、絵画の方も学生の援助をたのむ。この邸宅も己に金とかえたれば、二階付七、八間ある家に移りたし。」
池上先生訪問（後藤）

今朝先生を訪問す。絵画の件にてたのみしに、先生曰く、「事情からの如くなれば、やる事にすべし。鈴木氏及び学校のものとも会いて、出来るだけ早くに絵は高橋先生のもとに五百枚、竹下氏が若干枚所有す。絵につきては自分も五百円融通せり。

第十三回本部会議 大正六年十二月三日 午後六

時半開会

△報告事項（後藤氏）

本日午後一時、物理学校内に於て池上先生、鈴木半蔵氏と絵画の事に関し相談す。其時学生側よりは後藤、寺師、佐多、佐藤、江並の五名臨席す。絵画頒布の事に付き、其の趣意、規約、会場、期日等を諒め、印刷に附し、凡そ二千枚計りを学生に配りて、絵画売付けに極力尽力せしむること。絵画一枚の価格は金拾円ずつとし、絵画の数は凡そ五百枚、之れを五口に分つ。即ち二百枚、百枚、百枚、五十枚、五十枚、抽選方法に由りて之れを申込者に配布するものとす。発起人の名義は之を学生会本部とし、会場、期日等は追て之れを定むるものとす。顧問に、池上、田沢、清水、鈴木、松原の五氏を仰ぎ、他に有名の画伯を一、二名加える事とす可し。

趣意書及び規約等に就ては、学生側に於て之れを書すること（寺師、江並、杉山之を担当す）。因に氏の絵画は高橋先生のとは、全然別種の性質にして、其純益金全部を上げて、学校経営費の幾分に加えんとするなり。其の枚数は時機に応じ、高橋先生より供給し得るものと提案可決。

上野の日本美術協会における絵画頒布会の具体的な段取りが以上の報告事項で詳しく述べられている。

第十四回本部会 大正六年十二月五日 午後六時半開会

絵画会問題（寺師）

趣意書規約（別記の如し）をつくり池上先生、竹下氏に見せしに、よからんとの事にて、今日鈴木半蔵氏が高橋先生に見せしに、地方にて二十五円に売りしものを東京にて十円にて不可なり。十二円なれば可。而して十二円一口とし、枚の中一流の絵三枚入る。池上先生八十円ならざる可からずと云う。又、一幅に付、学生の運動賃とせり。申込事務所は学校事務室。決定は明日午前。

骨董品売却

尚、高橋先生の骨董品は今月十日頃、美術倶楽部（筆者註：上野美術協会のこと）にて行う。新聞にも広告し、婦人会などにも通知す。又、各区の名誉職などへも学生が趣意書を頒布せら

れたし。品物は千余点、書画四百点、会場に付き竹下氏曰く、「学生が監督し、番人は女子供を使う。」

絵画頒布会の趣意書作りについて検討がなされた。また、高橋琢也が自己所有の絵画骨董品を日本美術協会での絵画頒布会で売却する決心をしたことが伺われる。

第十五回本部会 大正六年十二月六日 午後六時
四十分開会
報告事項

1. 骨董品書画会の件 — (江並)

昨夜、後藤、杉山、江並、三人にて竹下氏訪問せしも不在。今朝、杉山、江並にて再度訪問。趣意書作製を早くする事。期間、学生監督方法、学生の人数、通知は何通位なりや。何日間。配布方法等を質問す。竹下氏の答えは趣意書の稿は出来たり。比較的よき凸版にてやる。明晩出来て九日には配布す。期日は十一日、印刷数は三万、監督は女看守を置き、その上の監督として、学生に出てもらふ。人数はなるべく多きを望む。出来うべくは学生全数、八日頃より高橋先生宅より骨董品運搬にかかる。紛失の恐れある故に、運搬も車にてなせども、学生の監督を乞う。協会に於ける物品の出納は諸君に願う。売残りもあればなり。配布方法は区役所にゆき公民権名簿をもあいて人名を定めよと、高橋先生の意見なれども、それにては大変なれば、封筒には名を書かず。学生が各町を手分けして金持らしき人の門前にて筆をとり出し、標札の名を見て記入し投入すれば可なり。約束郵便にてする位ならば学生の手はわずらわさず、訪問者は竹下氏の案を可とし、池上先生を直ちに問いしに、先生曰く、「学生が軒別に配布し歩くは孤児院の如く、反ってその人の嫌悪の情を起さしむ。自分はいかの如き方法を快しとせず。」

鈴木氏曰く、「そんな事をして出来るものにあらず」と。反対二人あるわけなり。よりに松原氏が竹下氏を訪い、その結果を持ちて本部迄来り報告す。

大意は自分は強いて軒別配布を主張したるに非ず。それは学生の誤解なるべし。自分

としては何れにてもよし。委員を定めてやる事は何れにても受く。

附一 封筒の中には招待券三枚、券を所有せざるものは入場料十銭徴収。

決一 戸別訪問可決

2. 絵画会趣意書の件

一口十二円、一口売却の運動費として四十銭を与う。

一流の人をなるべく多く揮毫者の中に入る。趣意書の事は福本(誠)先生にたのめとの田沢先生の意見なり。協賛員は教授全部に願う可し。

期日は二十三日午前九時。午後三時に抽選を行う。画会は東京のものを主とし、学生の父兄に運動し、地方の高橋先生の画会の障害とならざる様にす。高橋先生の売残画を売るも可。又は学生が各県を売り廻るも可なり。

今回の挙は更に、第二、第三回の画会をやる為の資金徴収として行う可し。

本部会の学生達は高橋琢也、竹下文隆、鈴木半蔵と連絡を密にとりながら、絵画頒布会に積極的に協力していった様子がこの記録より明らかである。また、絵画頒布会の運営方法についても充分な検討を行って準備したことが伺われる。

第十六回 本部会議 十二月十三日 午後六時より上野美術協会内に於て開会

決議事項

1. 来る十四日午後五時より、高橋先生主催の忘年会を上野精養軒に於て開催せらる。絵画委員江並、寺師、杉山の三氏、此の期を利用して学生会本部主催の絵画展覧会趣旨を説明して同情を求むることに決定。
2. 協会内の宿直は毎日午後三時までに各室より一名づつ決定して各室主任より本部長迄通知することに決定。
3. 各室係員の出欠席は午前八時十五分前迄に各室主任より本部長迄届出ずること。
4. 展覧者中に不審の者あるを認めたる際は各係員に注意を与うるため「御苦労様」という暗号を用うること。
5. 本部長より各室へ対して命令事項のある

際は伝達簿に明記して、各室へ命令伝達すること。

6. 昼食及喫煙は係員控所に於てなすこと。
7. 各室戸障子の開閉は各室の係員にて行うこと。
8. 本部長の下に本部長附を置くこと（本部長附は江並委員とす）

第十七回本部会議 十二月十三日 午後四時四十分 上野美術協会に於て開会

報告事項

十二月十二日 入場者 百三十一名 売上高 七百円弱

同 十三日 入場者 九十一名 売上高 八百円強

成績至って不良。之れは恐らく高橋先生の広告文面の意味不徹底に由るなる可し。即ち其の一箇所に「正札売却の儀は都合に由り取消し云々」の記事あり。

今後、趣意書配布方法として、先ず重なる諸官省、有名なる銀行、会社、帝大の各分科、各国公使館等に対して、本校創立委員長の名刺を持ち行きて懇口に御願ひすれば顕著なる効果を納め得可しと。

決議事項 伝達係りを設けて意義説明

1. 陳列室係りの中、不忠実なる人間は之を除き、他の役に廻す事（寺師君發議）可決。
2. 松原氏より、今夜宿直人員は六名とし、一名を減ずる様交渉あり。議論百出し、結局左様致す事にせり。
上野美術協会の係員に、毎日往復の電車賃、弁当代を出しては如何？而して其れに要する費用は各組より五十銭宛徴集する事（佐多） 否決
3. 学生の係員は正面の玄関より昇降し、下駄は各自一定の場所に置く事。
4. 売却品は客の依頼に応じて、物品を先きへ届ける係員を設くる必要あること（鈴木）。可決 之を運搬係と命名し、即刻学生中より選択する事にせり。
5. 学校、病院の写真を疾く手に入れ、上野へ届出ずること。
6. 招待券を上野公園入口に於て公衆に配布すること。

7. 午後四時、第一鈴により入場を拒絶し、物品の点数調査に取懸り、四時半第二鈴に由りて各自退出すること。
8. 第一号室、第六号室は他に比して遥に大。且つ陳列物品多き故、之れを二等分し、夫々主任、副主任を設くる事。
9. 目下上野の会場に來らぬ者に対し、早速召集令状を發し、係員の不足を補うこと。（組長此の事に當る）
10. 書画、骨董展覽会の趣意書を配布する時、同時に学生会主催の趣意書も持ってきて御願ひすること。
11. 学生の殆ど大半は、其のエネルギーを上野に集注しつつある故、絵画の方を顧る者少なし。此故を以て、新たに絵画係なる者を設け、爾後上野とは没交渉に極力絵画の申込者募集に努力すること。可決 早速、本部員絵画係り三名の外に、各級より二名宛選出することにせり。
12. 茶菓子は係員控室に於て出すこと。

第十八回本部会議 大正六年十二月十五日 午後五時二十分 上野美術協会内

報告事項

1. 本日入場者 百八名 売上高三百七十七円
各方面に向つて書画骨董展覽会の趣意書、並びに学生会主催の絵画趣意書を持ちきて夫々依託す。
其内訳次の如し。文部省、通信省、内務省、農商務省、司法省、陸軍省、海軍省、各百枚宛、メ七百枚、今村銀行 50、田中銀行 30、赤星銀行 30、村井銀行 50、森村銀行 50、メ百十枚、三井（銀行、物産、鉱山、管理）各百枚、日本郵船会社（小林栄吉）二百枚、東洋汽船会社百枚、鐵道院百枚、古河鉱山五十枚
日本銀行、住友銀行、紅葉屋商会、日露銀行、林まる平商会、玉塚株式会社、芝川商会、百〇九銀行、他三ヶ所 合計參百參拾枚、帝国大学、医科（入沢、青山、三浦、近藤外科、佐藤外科）各五十枚メ二百五十枚、工科、文科、法科各五十枚 合計四百枚、各国公使館全部四百枚、陸軍階行社、海軍水交社各二十五枚、報知

新聞半込支局一万枚新聞折込、横浜方面：安藤市長、瓦斯会社、阿部、渋谷病院長、若尾、大谷、原、茂木、安藤重貴
 ○市外特別郵便 貴族院議員、衆議院議員

市内公民権所有者の一部
 浅野、前田両侯爵家 各十枚宛

小鷹狩元凱氏(有力者)半込二十騎町
 ○名古屋市中区八百屋町、井上惣次郎氏(成金)の許に趣意書を発送す(二年岡部君紹介)

2. 本日、古河、土遠野両氏、高橋先生の命令に依りて米人マキム氏の処に展覧会趣意書を持行く。本日多忙に付、面談出来ず。明後日来れと。

次に聖路加病院に久保氏を訪う。在らず。田沢先生の紹介にて池田学士と会い、二十一枚渡す。外に外科医学士に三枚づつ配布す。次に立教大学に行き、スナイダー氏に会い、展覧会の事に付語る。来る月曜日午前十時再会を約して帰る。

3. 絵画の件に付き報告(寺師)
昨十四日午後五時、上野精養軒に於て、本校創立委員長高橋先生よりの招待に由り、創立委員、顧問並に本校書教授とを合せ、忘年会開らる。

当日会する者二十四名、内訳左の如し。
 本校創立委員 高橋琢也、大角桂蔵
 本校諸教授 佐藤達次郎、三宅鉦一、田沢鐐二、池上作三、井上遼一、井上誠夫、得能文、千葉真一、竹内作次郎、上田常吉、八代豊雄、山川一郎、古屋芳雄、浅田一、下平尚、白木正博、平松吾一
 本校庶務 鈴木半蔵、松原一一
 本校学生 寺師順一、江並猛、杉山泰治

宴たけなわにして酒気徐ろに廻る頃、高橋先生静かに坐を立たれて、是迄の経過報告、今後の方針等に就き腹藏なく申述べらる。

次に佐藤博士、熟誠なる面持ちにて、懇ろに謝辞を述べらる(某氏の談によれば、博士は是迄あれ程長く語られし事なしと云う)

次に寺師より学生を代表して、謝辞を冒頭に、学生会主催の絵画頒布会の趣意を語り、諸先生の熱心なる応援を懇願す。最後に池上先生よりも絵画の事に付、諸先生に乞う所ありし。斯くて心地良く飲み、且つ語り満座笑みを湛え乍ら、高橋先生の御健康を祝して乾杯す。

此の間に在りて、三宅先生、大に斡旋する所ありき。

自動車にて帰えらる高橋先生を見送り、午後十時美術協会に引上ぐ。(余等窃力に思うに、此度の会合は確かに絵画企画の事に付有効の結果を来せしならんと)

当日御申込の分、佐藤博士三十口、八代博士三口、池上、田沢両先生各十口、三宅博士百円の寄附あり。

○本日午後一時、在来の絵画係三名の外に、各組より選出の絵画係とを合せ都合十名、美術協会の或る一室に会して今後の活動方針に付き協議す。

早速、昨夜の宴会に欠席されし諸先生十二名に対して絵画の趣意書五枚宛を送附す。此の席上、係長後藤氏の挨拶ありき(杉山)

○絵画係り増補の所以に就きて。

△協議事項

絵画頒布会の会計は松原氏に依頼す(鈴半より)

連日連夜の御奮闘に疲労されし高橋先生の御容態を今夜見舞に行くこと(川目氏依託)

高橋琢也主催の忘年会では、高橋琢也と学生達の繋がりが活動のみならず気持ちの上でも一体化していったことが良く分る。なお、佐藤達次郎は寡黙な人物であったが、この日は珍しく雄弁であったことが記されてある。佐藤達次郎は東京医学専門学校校長に就任してからも終始不言実行の姿勢を貫いた。

第十九回本部会議 大正六年十二月十七日 午後

五時半 上野美術協会に於て
報告事項

十二月十六日、入場者二〇八 売上高
五〇八円

午前八時頃高橋先生より、華族方に対し凡そ
六百枚程趣意書を配布する様申渡さる。展覧
会の成績兎角面白からざれば、此上は新聞折
込として一万枚程出し、且又理髮屋、湯屋等
にもピラ広告凡そ百枚程致せり。

十二月十七日、入場者七十六、 売上高
百九十三円

○趣意書配布 帝国海事保険会社 20
東京火災保険会社 20
東京建物会社 20 明治製糖 20 帝
国劇場 200

○本校協賛員に対して、学生一同よりの名義
にて年賀状を出すこと（凡そ七百枚）可決

○高橋先生の命に由り、在京、府下の華族方
に対し凡そ六百通ばかり、市内特別郵便或
は二銭の切手貼布して、展覧会並に絵画の
趣意書を発送せり（杉山）

○又絵画頒布会の申込を尋ぬる為め、各学級
より委員を上げて、大々諸先生の許を歴訪
することにせり（杉山）

○上野の展覧会の売行き、斯の如く不成績な
れば、今後如何なる方法を講ずれば、効果
を納む得可きかの問題に就き稟議を凝ら
す。結局、新聞社に頼み、少々誇張的に経
過報告を掲げて、人心を上野へ吸収せしむ
るにありと。依って、各室の主任にて組成
し、一組二人宛となし、明朝早速帝都の有
名なる新聞社十一ヶ所を訪れて、御願いす
る事に決す。

○絵画頒布会の申込者運動に付き、本校顧問
並に絵画の賛助員になられし人の分、手数
料四十銭宛は之を学生会に寄附する事と決
定。

高橋先生報告（十月三十日、午後一時開始）

例として、諸画工に書いて貰った絵画を、
抽選に由って一枚二五円平均に買って貰う事
にした。又、函館に於ても市長や、鈴木、木
内の両博士や、渡辺、遠藤 氏等が発起人と
なって、絵画の売捌きに奔走して呉れてる。
又、仙台にては県知事、市長、実業家では伊

沢、八木氏等が尽力して呉れて居る。岩手県
に於ても、県知事と、内務部長とが非常な御
熱心で、一々銀行家や実業家を歴訪して呉れ
た。宇都宮では、是又県知事、内務部長、上
野、村上と云う実業家や安田銀行の支店長ま
でもやって呉れてる。私が行って頼めば、誰
も厭な顔を見せず二者引き受けて呉れた。

殊に日本医専の紛擾事件が新聞に出たの
で、皆良く知って居られる。東京の人よりも
地方の人の方が人情に厚いように思われる。
一方では寄附画が出来て来る。百円から、
七十円、六十円、五十円、二十五円と云う風
に色々ある。絹代が今日迄に千八百枚、之れ
に入れた資本計りでも容易な金高でない。

書画が七百五十点、外に骨董品が
千二百六十六年ばかりである。二階には未だ
ある。夫れ等を今度売ろうと思うが、来年の
三月迄上野の美術倶楽部に、既に申込者が
あって今やる事が出来ない。殊に此頃は高橋
男の入札や、佐竹侯の立派な所蔵品が入札に
なるので、自分の品物が如何にも見劣りする
ような気がするから、今売るのが不利益のよ
うに思われる。然し品物だけは確かにあるの
だから、何とかなるだろーと思う。

英文趣意書 五百枚 五百枚都合一千枚を騰
写版に印刷して、築地居留地に百枚、帝国ホ
テル百枚、横浜のホテル、外人の主なるもの
に二百枚、カフェー・ライオン二十枚、通行
人の外人に二十枚を頒てたり。

絵画頒布会の件（杉山）

松原氏に六十口、杉山に二百口、計二百六十
口、約三百口の見込なり。

役割は本日決定し、明朝七時南明倶楽部集合
の予定なり。

帳場 一六人、受取証二人、抽選揮毫券二人
会場取締十人中接待二人、会場係七人
取締は午後一時絵画をたくし、午後二時抽選
す。都合二十六名

本部応援 一中本、古川、寺崎、杉山、川目、
他は交替出張

池上（作三）先生訪問 二年青山君 田
沢先生 一中本君

浅田（一）、小宮（豊隆）先生 一川目君

第二十二回本部会 大正六年十二月二十六日 午後六時半

二十六日

約四一六円

合計 壹萬三千九百四十九円

報告事項

後藤（哲雄）本部長絵画会評

学生は骨董品展覽延期に依り画会に対して活動を尽し得ざりしも、先ず好成績を挙げ得たり。所得金は池上先生立会の上処置すべき筈なりしかど、先生は来られず。且つ鈴木氏も明日よりは多忙となることなれば、やむなく後藤、杉山、鈴木半蔵氏の実印を押し、千九百二十三円三十一銭の金を高橋先生に呈出せり。

提案事項

絵画販売旅行（迫田、江並）

此休暇を利用して、地方に売捌きに出でたし。教授の同行を得しば此上の幸なれ。教授同校せられずとも、三人にて行ふべし。成功の見込み有。

決議

提案一 可決、但し実行の前に高橋先生の承諾を得ること。

方法は絵に正札を付し、一組二人位とし、先ず二組を派出のこと。

江並、寺崎 — 九州地方

鈴木（佐多）— 仙台地方

◎十六日間の入場者及び売上金額
入場者

十二月十一日		一一五円
一二日	百三十一名	六〇五円
十三日	九十一名	八二八円
十四日		六〇一円
十五日	一〇八名	五十二円
十六日	二〇八名	五〇八円
十七日	七六名	一九三円
十八日		二九〇五円
十九日		五三九円
二十日		三二二円
二十一日	九二名	四七八円
二十二日		一二七円
二十三日	九六名	三二三円
二十四日	二八名	六九三円
二十五日	七八名	一一八〇円
二十六日	一〇六名	二一六六円

外に原敬氏約二〇〇〇円

第二十三回本部会議 大正六年十二月二十八日

午後五時二十分 麹町区三番町 市場亭に於て開会（当日は上野にて開催せる書画骨董展覽会の慰労会、閉会後に於て臨時行ふ）

報告事項（後藤氏）

- 過日来上野の美術協会に於て挙行せし書画骨董展覽会の成績に就て述べ、併せて立教大学合併問題の刻下に迫まりしを告ぐ。
- 続いて杉山（泰治）氏より絵画頒布会の成績に就き報告し、其の決算報告を齊らす。
- 絵画の地方頒布の事に付、先生より承諾を得、且つ佐藤（達次郎）博士へ渡さる可き筈の絵画三十枚、先生の手にて為し下さること承認さる。

協議事項

絵画の地方頒布の方法に就て種々協議あり。

以前の如く抽選法に由るか、將た又最小限度の価格を別記し置きて、一部売りにするか。結局、臨機応変の処置をとる事とせり。

年が明けると、学生達の地方での絵画頒布活動が始まった。一方では、上野都座や三会堂で高橋琢也所有の絵画骨董販売会が学生達の協力のもと開催されていった。

第二十四回本部会議 大正七年一月九日 午後三時 開始

報告事項

絵画の件（寺師）一月四日の朝、佐多氏と共に高橋先生に会し、絵画地方頒布の事に関し、名古屋地方に限られて許可さる。其後田沢先生と打連ね池上先生を訪問し、色々協議する所あり。夜十一時頃迄語る。昨夜、川目、江並の両君と共に池上先生を訪問し、色々先生の意見を訊き、紹介状を貰う。絵画の評価一般に高しと聞く。依って今一応高橋先生に交渉して見る積りなりと。

第二十五回本部会議 大正七年一月十四日 午前十一時四十分

報告事項

- （川目君）一月十日、寺師、江並の二君、先ず鎌倉指して発足さる。其際学生会員の中より六十円、東京にて絵画を売りし金四十二円、合わせて一〇二円持ち行かる。次に先日富田医師よりの紹介状五大枚貰い受け、本部に預かり置くこと。
- （青山君）一月十三日、寺師一行鎌倉より消息あり。曰く、鎌倉病院副院長の斡旋にて売行きよしと。又仙台に在る鈴木君より通信あり。曰く、絵画の趣意書至急送り来れと。

協議事項

東京に於て近く第二回の絵画頒布会を開くも良けれど、それより戸別訪問して一部売りにしたら如何か、と云う高橋先生の意見に基き、色々と協議す。

1. 其結果 両方を兼ねて行ふ事に一座決定す。
2. 先日富田先生より貰い受けし紹介状の処置に就きては此事判然と定まりたる後に運動する事。
3. 池上、田沢両先生を訪問して、絵画の紹介状を貰いに行く事（委員 青山、長、佐多）
4. 絵画の趣意書印刷は即刻注文する事（此の方は川目君に依頼すること）
5. 仙台へ佐多君が出張する事

第二十六回本部会議 大正七年一月十八日 午後二時半

報告事項

- （長君）一月十四日の夕刻、絵画の事に関し、池上先生宅を訪う。先生より宮城県県会議長宛の紹介状を貰う。而して先生の意見としては、近々中第二回絵画頒布会を開きたし。又、絵画並に書の行商を良かる可しと語る。依って期日其他の事に就き、高橋先生の御意向を聞きたる後定む可しと。同時に池上先生より学生会へ絵画七枚寄附ありたり。
- （川目君）一月十六日の夕方、青山、長の両君と共に高橋先生を訪問す。而して次の事項に就き計る所あり。
 1. 絵画は個別的に一部売りして可なるか。

或は以前の如く頒布会を設くるかの問いに対し、先生には両方共やるが良かる可しと答えらう。

2. 絵画頒布会と書画骨董展覧会と一緒にかけ合うような事なれば、悪しかる可しとの質問に、骨董展覧会の期日は目下考え中、場所も選定中なり。よしんば絵画頒布会と方とかち合うにしても次回には多くの学生を煩わす心算なれば大した差支へなかる可しと。
3. 絵画の地方頒布として千葉町、或は水戸地方に於て行つても宜しきかとの問しに、何れも差支えなしとの許諾を得。
4. 上等の分を貰い受けたし。請求に由り、同月三十七枚本部へ持ち帰り。
5. 石黒（忠憲）、後藤（新平）、佐藤（進）、山本（条太郎か）、股野（琢）、大岡（郁造）、肝付（兼行）等の諸名士に依頼して書かす可し。既に下田歌子の分出来上れるあり。之等は小額の寄付者に対して贈る可しと。書揮毫委託
6. 頒布会期日は何時にても宣し。池上先生は成る可く早く二月二十日頃良かる可しと云わる。
7. 百本近く携帯して、今朝佐多（正蔵）氏仙台へ向け出発せり。佐多氏北行
8. 次回の絵画頒布会には（高島）北海、（荒木）十畝、（田中）頼章、（池上）秀畝等の上等の部類も入る可しと。入会者二百名に対する絵画の数

決議事項

- 来る二月三日（月曜日）千葉町に於て学生会主催絵画頒布会を挙行すること。其方の活動、準備の爲め、本部員六名は少なくとも一週間以前、即ち一月二十八日頃より千葉町へ出張すること。其の委員内定す。
- 東京市に於ても、二月十七日（月曜日）第二回の絵画頒布会を挙行すること。次回より絵画の斡旋料は五十銭宛となすこと。五十銭に値上げ
- 次に鈴木さんに会い、絵画受取りに高橋先生宅へ赴くこと。（委員 同人）
- 書を依頼しに寺尾博士を訪問すること。

又、千葉方面の紹介状を貰いに土屋代議士を訪問すること。同様に福本誠先生宅へも参ること（委員長、難波）

この日の決議を受けて、長委三美は難波静夫とともに寺尾亨を訪れ、揮毫を所望した。長委三美の大正7年の日記³⁰⁾には次のように記載されてある。なお、学生達は1月より2月半ばまで千葉、仙台、横須賀、鎌倉を中心に精力的に絵画頒布活動を行っていた。

大正7年1月20日 法学博士 寺尾亨先生を壺南坂の邸に 一月二十日 難波静夫君と「実は今日先生を伺ったのは他でもありません。昨年末、画会をやったのでありますが、中には名士の書をと望まれる人がありますで、一つ先生にも書いて頂戴したいです。」「何時か学生諸君が来て、画を買ってくれとのことで、私は貧人で買うことは出来ぬ。然し、おれの書は貧しいが一つ頭山（満）や犬養（毅）に書かせてやるがよい。頼んであげると申して居た。一寸頼んでいたから行って御覧なさい。僕も蓋切りとして書いておきます。紙は晩翠軒で中画全紙がよかろう。」

長委三美はさらに福本誠（日南）や寺尾亨を訪問している。

東医創立委員 福本日南先生を 小石川指ヶ谷邸に

「先生、今回千葉に画会開催につき色々ご配慮くださいませ、三輪田校長も色々とお世話下さいまして有難く存じました。ついては重ねに御願ひですが、当地の賛助員の方に創立委員福本先生、寺尾先生の書が欲しい、願ってくれとのことで誠に済みませんが、どうか書を書いてください。」「いや、僕は守りはまずいの。書にはならぬ。書くまい。」「どうか御願ひいたします。」「寺尾ハ書イタカね。ヨク書イタネ。而シテ沢山書にもいろうノダロウ。マアとデハ墨ヲ付ケテ見ルカ。」一時間も墨スリて後先生。寒気烈しく。植物園かすかに雪二、三点。羽織をぬぎ、画全紙をまたげ、書中曰、

螢火の影より細き埋火に

天地をこがす光ありけり

法学博士、創立委員 寺尾先生を邸に 女中取次ぎに「今夜は書くから墨を擦って置いてくれ。」

書斎において暫く雑談。君の墨を擦っているうち、先生天機嫌にて、「やや、今晚は書くよ。よう来た。そうわなくてはならぬ。今晚は張継君が来て愉快地に飲んだところだ。僕が書くのは原料がそれも少しではいけぬで。ハハハ…。字を書くとして支那人からいうと、書くとはいえぬよ。この額などなかなかよく出来とる。まあ書いてみようかな。僕が書くには手が入る。字というものは筆勢いなくては。則一気呵成だ。一人は硯を持って墨をつけるに便にするのだ。そこで一人はこの紙をしっかりと持ち、一人は硯をよく見えるにしてくれ。此筆は良くもないが然し二十円位するだろう。この硯も支那よりの土産物だ。やはり原国だからいいね。毛氈これをもらったのだ。ハハ…。どれ書きようと。」中画全紙に乗り、

山水有清音 水長月清処 山紫水明

これらの長委三美の文章には、東京医学講習所学生長の長委三美が絵画販売活動を通して福本誠と寺尾亨に薫陶を受けている瞬間が余すところなく描かれてある。

第二十七回本部会議 大正七年一月二十五日 午後七時

報告事項

絵画地方頒布の件

- a. 横須賀方面は成績可良なる可しと予期せらる。而して千葉町と同じく二月三日頒布会を行う由。
- b. 千葉の絵画会は好成績を得るに難かる可し。目下の処、大七十口の日算。今夜青山（豪一）、山本（仁）の二氏更に出発す。
- c. 仙台方面は成績不良との通報あり。 絵画地方頒布
- d. 諸名士を歴訪して書の揮毫を頼み歩き、夫々承諾を得たり（三浦（悟郎）三本、頭山（満）、大岡（郁造）、中村寿堂）

協議事項

先に本部会議の決議に由り、東京に於ける第二回絵画頒布会は来月十七日開催する予定なるも、認可を得るは大本の目的にして、絵画は枝葉の問題なり。故に第二回の画会を行うに当りては、余程時機を選び、前回の挙行を参照し、大に考うるところなかる可からずと。即ち、延期説なり（後藤君の意見）

第二十九回本部会議 大正七年二月五日 午後七時

報告事項

千葉絵画頒布会報告（中本）

成績 絵画申込数 三拾壱口 外に
寄附金 四拾九円

現金四百二拾二円を得、諸雑費に二百円を要す。

開催日 二月三日午前九時より午後五時迄
会場 千葉町市場 油屋旅館内

千葉町賛助員 五十嵐重郎、原庫二、神谷良平、武本為訓、武藤切次郎、内田実、古川国次郎、佐瀬喜六、三輪徳寛、三和弥三郎

席上揮毫者 竹田敬方、伊藤英翠、海野梅城、徳永耕村

日夜奮闘努力した割に成績思わしからざりき。

千葉町町民は画会に中毒の気味あり。

折々画会の催しあり。且つは借銭を残して帰る者多き故、画会と云えば町民の信用宜しからず。以上、三大原因に基き、労して甲斐なかりき。

絵画頒布の為め仙台行（佐多）

鈴木君の注進に由り、一月十八日仙台に北行す。其時旅費に拾五円の金を借り、絵画池上先生寄附の分とも合せ百十七本携帯す。仙台方面は白雪皚々水に鎖されたり。市街は約一里四方ありて、財産家は概ね場末にある事とて、其の運動に困難を嘗めしと。

売行拾四本、価格百三十二円、外に三本（之は金未だ受け取らざるも、処分は鈴木君請負う）

費用 金六拾円七拾九銭（旅費、滞在費、其他諸雑費）

収入 金八拾六円二十一銭（之れ残金にて絵代含む）

結果 全力を注ぎて此の事に当りしも、次の諸原因にて意の如くならず。漸く実費を得たり。

原因（失敗せし原因）

（一）東北地方の厳寒に活動自由ならざりしこと。

（二）如何なる山間僻地にも、知事の熱心なる斡旋にて高橋先生の絵画が既に限りなく行渡りしこと。

（三）画家五名仙台に入り、需に応じ揮毫し居ること。

（四）新聞社が強請的に絵画を二十五円乃至三十円位にて市民に売り付け居ること。

（五）本人辜丸炎を病み、運動兎角鈍りしこと。

附記 山形仲芸博士の許に壺週間程話かけ、漸くにして面会を得、先生は来る三月東京に医学会ある時上京して、佐藤博士と会われ、本校に対し応分の寄附金をなす可しと語らる。又七十七銀行頭取吉崎某は大に尽力して下されし。

高橋先生訪問（後藤）

一月三十日夜 高橋先生訪問

横須賀より電話の一件を語り、是非共、（池上）秀畝、（田中）頼章、の絵画を抽選会に入れて呉れと懇願す。

答：成らず。之の絵画に代うるに鉄園、採令の画を以て為す可し。翌朝用意して置く。受取りに來れと。

第二回書画骨董展覧会の事付、質問す。

a. 期日は三月十日頃 b. 会場は赤坂靈南坂の三会堂、一方松阪屋の間館にも交渉中なり。c. 広告方法、新聞にも出し、学生にも働いて貰う。d. 看守方法 多くの女看守を纏い、成丈け卒業生の方に其の遊督を委すること。今度は上野と違い、多く学生の手を煩わさぬ方針なり。

第三十回本部会議 大正七年二月六日 午後三時
報告事項

鎌倉、横須賀方面 絵画頒布の件（寺師）

一月十一日、学生会本部より金六十円、絵画百五十三枚を携帯して鎌倉方面に出発す。後日必要上、絵画十二本を加う。鎌倉病院副院長大に斡旋する所ありき。鎌倉倶楽部に於て、絵画展覧会を開く。成績思わしからず、各医師の戸別訪問を行う。逗子、葉山にも行き、而る後横須賀に至る。此処に於て我々学生と縁故深き奥宮（衛）市長（大正5年当時、学生父兄会会長）に会い、種々御尽力に預る。

其の結果、市の重なる人物を協賛員に頼み、抽選法に由りて絵画を頒布する事に決し、其れを印刷に附す。画会の催しに付、一月二十七日の武相新聞に出る。元来横須賀は画会の多き所とて、市民に歓迎されざりき。特殊に尾竹々坡氏、横須賀に滞在するを聞く。成績 抽選法に由り、五拾壺本、壺本売りは十本位。

鎌倉、逗子、葉山方面にて四十本位売る。売上高 金八百円位、諸雑費金二百円位
期日 大正七年二月三日 午後一時より行う。
会場 横須賀市田戸小松楼に於て。

第三十一回本部会議 大正七年二月七日 午後三時

報告事項

二月六日午後七時高橋先生訪問
第二回書画骨董展覧会の事に付訊く。来る三月十日より赤坂靈南坂、三会堂に於て行い、今月十七日頃より上野広小路みやこ座の所にて行う計画あり。

第三十三回本部会議 大正七年二月十二日（火） 午後四時

報告事項

本日午後五時頃、松原氏本部を訪う。要件は次回の書画骨董展覧会の事に関してなり。即ち、此度開催の展覧会は二月十六日より約十五日間、上野広小路都倶楽部に於て催す積り。物品は凡そ五六百点陳列し得可し。而して会場は之れを五区に分ち、一区毎に一名宛の看守監督を置かん。外に接待係三名、輸送係兼事務補助の為め二名を挙げ、凡て学生の方より十名を要すと。其の広告方法は篤と竹下氏と相談するも、此度は前回に比し麗々しく行う心算なり。

第三十四回本部会議 大正七年二月十四日（木） 午後七時

東京第二回絵画頒布会（佐多）

本日学校に於て学生会の委員、色々協議す。其結果、大要次の如く決定す。学生会員は全部責任を以て、絵画頒布会を決

行すること。本部員は之を援助すること。絵画は学生一人に対し、出来得る丈け二枚以上売らせること。施行期日は三月三日。価格は一口に付、拾円乃至は貳拾円、手数料は五十銭乃至六十銭、印刷物其他のことは明日より取懸る事。絵画会に付、本部の意向此の申達に由り、本部委員は左の如く協議す。

1. 申込価格は一口に付、拾円宛とし、成可く良い画を入れる事を高橋先生に御願いすること。
2. 手数料は一口に付、五十銭宛になす事。（此等の意向を齊らして、明日中本氏より学生会員に通告する事に決す）

高橋先生宅訪問（中本）

昨夜九時、各地方の絵画頒布係の者と共に、高橋先生宅を訪問す。不幸にして先生就寝されし後なれば、代理執事に面談し、左記報告書を示して金七百六十七円九十三銭を渡して帰る。

絵画地方頒布報告書内容

絵画売上本数

- 一. 九十四本（内一本進呈） 鎌倉、横須賀方面 一. 十七本（内三本未納金） 仙台地方方面 一. 三十二本 画三十本売上 画一本謝礼
- 土方伯の書 千葉地方方面 計 壺百四拾参本也

残本数 一. 七十五本 鎌倉方面

- 一. 九十本 仙台方面
- 一. 百六十八本 千葉方面
- 計 参百参拾本

収入の部 一金 八百貳拾五円、鎌倉方面 一金 壺百参拾貳円 仙台方面 一金 四百貳拾参円、千葉方面 計 壺千参百八拾円也

支出の部 一金 貳百八拾円参拾貳銭、鎌倉方面 一金 六拾壺円八拾五銭、仙台方面 一金 貳百参拾貳円七拾参銭、千葉方面 一金 参拾七円壺拾七銭 東京に於て諸準備支払 計金六百貳拾円〇七銭

差引金高 七百六拾七円九拾参銭也

以上は地方における学生達の絵画頒布活動を記録し

たものである。以下は上野都座での高橋琢也所蔵の書画骨董頒布会についての記録である⁶⁾。この頒布会は大正7年2月17日より3月3日まで開催された。

第三十五回本部会議 大正七年二月十六日（土曜日）

報告事項

上野展覧会報告（小川） 高橋先生所蔵の書画骨董展覧会は愈々明日より、上野広小路都座階上に於て挙行する筈なり。

東京第二回頒布会（長）

本日学生会委員二名、東京第二回絵画頒布会挙行の承諾を得可く、高橋先生を訪問す。其際、先生の口より、千葉、仙台方面の者は余りに費用を要し、又横須賀方面の者は廉価に売却した所以を非難し居れりと。

明晩七時本部に集合して、地方絵画頒布係員挙げて高橋先生を訪問して、各自弁明しに行くこと。係員一 中本、後藤、寺師、杉山、長、佐多、江並

第三十六回本部会議 大正七年二月十八日（月曜日）

報告事項

第二回東京絵画頒布会（長）

画会に付、学生会員の決定せる所、次の如し。申込金額一口付金五円、絵画一本の価格十二円。手数料各一円宛。席上揮毫なき代りに荒木十畝、高島北海等の名流を入れる可し。期日は延期、三月十七日にするか、二十三日にするか。会場は神田南明倶楽部に於て行う。

この日、上野広小路都座において絵画頒布会が開催された。

第三十七回本部会議 大正七年二月二十一日

上野展覧会報告（山本）

客足多きに比し、売行き面白からずと。

二月十七日	入場者百一人	売行 五十六円
十八日	二十五人	八円
十九日	八十五人	四円十銭
二十日	八十二人	七円
二十一日	八十七人	七十八円 70 銭
		(内六十円 堀口協賛員)

第三十八回本部会議 大正七年二月二十五日（月曜日）

高橋先生と面談（後藤）

本日上野広小路、都座樓上に於て認可申請係員、高橋先生と会う。依って「千九百二十三坪（坪一円）売れ、又青森の山林一万円にて売却したりと聞く。仙台方面にて絵画百本売し、小額の寄附金多数集まりし由。何せ祝福すべき事なり。近日中、大阪方面に向け出立す可し。

上野展覧会報告（山本）

骨董品売行き不良に付、本日より二割引とせり。然も猶も値切る者ありと云う。

二月二十二日	入場者百三人	売高 三十二円
二月二十三日	百十三人	売高 十五円
二月二十四日	百六十人	売高 六十二円六十銭
二月二十五日	九十五人	売高 八十一円五十銭

●開会当日より本日迄の売上金二百九十四円五十銭

この時期、高橋琢也は一方では所有する青森の山林を売却し、新医学校のための設立資金に組み入れた。この話は学生団の学生に伝えられていた。高橋琢也と学生達の二人三脚の様子が良く出ている。

第三十九回本部会議 大正七年三月四日（月曜日）

松原氏の談

今度引続き、赤坂区溜池町一番地三會堂（電話新橋一三〇四）に於て、高橋先生所蔵の書画骨董展覧会を開催するに付き、其総監督に後藤本部長に御願ひ致したし。其許可を得んが為め、来館せし次第なり。而して開催期日は来る三月七日より十五日間施行し、部長他の係員として学生十六名を要す。女看守は十二名雇う心算なり。

之れを入札競売するようになれば、経験上得る所甚だ少なかる可し。二千余点の品物ありて、それ等の総額壱萬円に上るか上らぬ程度と思わる。依って以前通り、即売を行わん計画なり。此際、学生の方にも一奮発を願ひ、各方面に向い運動して貰い度き旨を申し述べ。茲に於て本部長は、此挙に対し本部として活動するか、将た又本部長一人のみが其主任として立つかに就き協議す。議論紛々として湧く。

三会堂における書画骨董頒布会は大正7年3月7日より3月22日まで開催された。三会堂(赤坂区溜池町)は大日本山林会(明治15年発足)が入居している建物のことで、現在でも存続している。

第四十回本部会議 大正七年三月五日(火曜日)

報告事項

上野都座楼上即売会(山本)(2月26日より3月3日まで)

全部買上高 三千六十二円三十銭

一日平均売上 百九十七円六十四銭三厘強

入場者総人数 千二百七十八人

一日平均人数 七十九人八分八厘

売却した点数 百十点

総支出金 四百三十円三十七銭

一日平均費用 貳拾壹円五十二銭

第四十一回本部会議 大正七年三月十一日(月曜日)

報告事項

三会堂の景況(後藤)

三月六日より八日迄の諸雑費に五十六円四十五銭を要せり。而して開会当時よりの好況に老骨満足の態なり。

三月八日 入場者 七十九名
売上金 二百九十四円

三月九日 入場者 百十五名
売上金 四拾七円五十銭

三月十日 入場者 六十九名
売上金 千五百八十八円

三月十一日 入場者 七十七名
売上金 八百九十三円二十銭

三月十二日 入場者 七十名
売上金百九十七円

報告事項

三会堂景況(山本)(3月12日より3月17日まで)

総売上金 七千百三十八円三十銭

総入場者 七百九十人

総点数 二百九十九点

外に千円の寄附金あり。

都合に依り二十二日迄開場の延期すると云う。

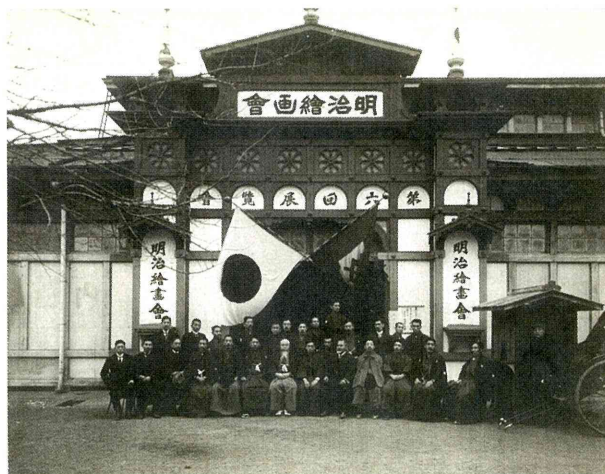


写真12 明治繪画會の集合写真(中心は高橋琢也)(大正7年に撮影か)

第四十五回本部会議 大正七年四月一日(月曜日)

報告事項

慰労金下附(後藤) 来度、三会堂並に上野都座にて挙行せる書画骨董即売会(写真12)に就き学生が働かれし行為に對し、其勞を謝せん為め、高橋先生より特に金參拾円下さる。此の金を認可が來たる後、本部員祝賀会の費用に当てんとす。猶外に七円繪画を売却したる金あり。

▲三会堂成績報告

三月十九日 入場者 九十一名
売上 二千六百四十六円半

二十日 入場者 四十八名
売上 三千九百円十銭

二十一日 入場者 六十三名
売上 四百五十八円十銭

二十二日 入場者 五十九名
売上 八百六十五円

売上高総合計 金一万三千十八円也

諸雑費メ高 金四百五十七円十三銭也

●差引残金一万二千五百六十円八十七銭也

合計 金壹萬五千八百円也

以上のように、繪画頒布会は東京医学専門学校が認可される大正7年4月11日直前まで続けられた。大正6年12月10日より3月22日までに行われた繪画頒布会により、多額の利益金が計上され、東京医学専門学校設立の資金として組み込まれた。なお、高橋琢也が主催した繪画會に協力した著名な日本画家は次の方々であった¹¹⁾¹⁶⁾。このような大規模な

キャンペーンは日本絵画史上でも稀なことであった。

高島北海、池上秀畝、荒木十畝、田中頼章、佐久間鉄園、池田蕉園、諸星成章、佐竹永陵、佐藤紫煙、小林呉橋、芝景川、岡田蘇水、嶋崎柳鳴、狩野探令、尾形月耕、近藤樵仙、福田浩湖、岡倉秋水、森脇雲溪、保門素堂、小林永興、五島耕畝、大瀧両山、中倉玉翠、広瀬東畝、田村豪湖、中島光村、勝田蕉琴、萩生天泉、村瀬秀月、湯原柳外、金鑄、大八木也香、貝原遜軒、吉原雅風、立岡快雪、西沢笛畝、点石、牧野永昭、伊藤綾春、金井広彰、竹田敬方、古香、鈴木両溪、和田春柳、海野梅城、太田秋民、小山雪耕、鳥谷幡山、橋木春陵、中田江畝、荒木月畝、上原桃畝、菅井雲樵、田村石堤、春嶂、三村靈風、上村松園、川合玉堂、竹内西鳳（その他百数十名）

（以下、次号に続く）

文献と人物

- 1) 高橋琢也（1847～1935）：広島藩出身。明治3年（1870年）、開成学校南校・ドイツ語教授。陸軍省参謀本部翻訳局を経て、明治18年（1885年）に農商務省山林局に入る。東京農林学校校長、青森大森林区署長、農商務省山林局長を歴任。我国初の森林法制定（明治30年）に尽力。大隈重信が明治30年に農商務大臣となり、非職となる。同僚の高島（得三）北海や原敬（のち総理大臣）も同様に非職となった。その後、宮内省顧問、北海道庁顧問、北海道山林会会長、北海道軽川軽便鉄道重役など併任したが、中国亡命者（孫文、梁啓超、康有為）の支援にも関わった。原敬の推挙により沖縄県知事となり、沖縄の近代化に力を注いだ（大正2年～3年）が、大隈重信が総理大臣となったことから辞任した。大正5年（1916年）当時は日本医学専門学校の学生（広島県出身者）の保証人となっていたため、学生達の総退学に際して支援を行っていた。大正8年には山林局長時代の功労と東京医学専門学校の創立の功績により貴族院議員となり、大正9年にはこれらの功績により勲三等を叙せられた。東京医学専門学校（現・東京医科大学）の学祖として尊敬されている。著書：「万国政表」（翻訳）、「森林杞憂」、「町村林制論」、「森林法論」、「起て沖縄男児」。雑誌「国論」の主筆。
- 2) 佐藤進（1845～1921）：佐倉藩出身。ベルリン大学医学部卒業。我国を代表する外科医。佐倉順天堂の佐藤泰然より始る三代目の当主。東京医学講習所設立時は顧問として加わり、東京医学専門学校設立を陰より応援した。嗣子、佐藤達次郎を東京医学講習所校長として派遣した。佐藤達次郎は以降、東京医学専門学校校長として28年間にわたって学校の発展に尽力した。
- 3) 中濱東一郎（1857～1937）：ジョン中濱万次郎の子息。森鷗外の東京帝国大学医学部の同級生（明治14年卒業）。ミュンヘン大学ペッテンコーフェル教授のもとに留学した衛生学の専門家。金沢医科大学（現在の金沢大学医学部）病院長。所有する回生病院および鎌倉病院の病院長。中濱東一郎日記は明治、大正、昭和の世相を伝える貴重な記録である。大正5年より大正7年までの日記には東京医学講習所に関する記述が散見される。
- 4) 森鷗外（1862～1922）：明治、大正時代を代表する文豪。本名は林太郎。津和野藩出身。東京帝大医学部を明治14年に卒業。ベルリン大学に留学。石黒忠恵の後に陸軍軍医総監となった。脚気論争では細菌説をとり、食物原因説をとった高木兼寛（慈恵医科大学創始者）や北里柴三郎らと学説で対立した。大学では山根正次や青山胤道は一年後輩であり、北里柴三郎は2年後輩であった。大正5年6月に学生達は森鷗外を訪問し、東京医学講習所設立の応援を頼んだことから、講習所の顧問となった。のち、辞任した。
- 5) 順天堂大学：順天堂史 1980年刊
- 6) 東京医学専門学校学生団：本部会記録（復刻版）1971年
- 7) 高橋是清（1854～1936）：江戸出身。1867年に米国へ留学し、1868年（明治元年）に帰国。大学南校（明治2年）に入学、さらに開成学校へ入学（明治5年）。文部省、農商務省官僚となり、1889年（明治22年）には東京農林学校校長となった。高橋琢也とは大学南校、開成学校、農商務省において経歴が重なる。高橋琢也著「町村林制論」の序を執筆し、以来高橋琢也とは親しい間柄となっていた。高橋琢也日記

にもしばしば名前が出てくる。大蔵大臣として昭和初めの我国の金融危機を救ったが、二・二六事件の凶弾に倒れた。ケインズ以前にケインズ流理論の実践により日本の経済を立て直したことで高く評価されている。

- 8) 石黒忠恵：明治時代の日本医学界に大きな影響を与えた臨床医。江戸開成校の医師を経て、陸軍軍医総監となり、我国の陸軍軍医制度を確立した。高橋琢也とは開成校や陸軍で相知る間柄であったと考えられる。東京経済大学の設立者の一人。東京医学専門学校設立では蔭より尽力し、東京医学専門学校評議員となった。
- 9) 三宅 秀（1848～1938）：江戸お玉ヶ池種痘所の創設者の一人である三宅良斉（みやけ・ごんさい）の子息。文久三年の遣欧使節の一員として有名。帰国後は横浜でウェットルに医学を学び、1874年（明治7年）に東京医学校長心得となる。その後、東京大学医学部教授、医科大学長を歴任した。子息の三宅鉦一は東京医学専門学校で精神科を担当した。順天堂医院の佐藤家とは姻戚関係にあった。
- 10) 東京物理学校：現在の東京理科大学の前身。明治14年（1881年）に東京帝国大学理学部卒業生21名が資金を持ち寄って設立された。専門学校令（1903年）では（旧制）専門学校として昇格できなかったが、1917年に旧制専門学校に昇格した。初代校長は寺尾亨（東京医学専門学校理事）の兄、寺尾寿であった。大正6年当時は夜間学校であった。1949年に東京理科大学となった。
- 11) 東京医科大学同窓会編：東京医科大学五十年史 1971年刊
- 12) 友田燁夫：高橋琢也と学生達（疾風怒濤の物語）（2）東京医科大学雑誌 68：167-191, 2010
- 13) 日本美術協会：佐野常民、九鬼隆一らにより、明治12年（1879年）に設立された龍池会が前身である。明治20年に有栖川宮熾仁親王を総裁に迎え、純粋な日本の伝統絵画を保存する目的で日本画大家たちが結集し、日本美術協会と改称された。日本美術協会は現在も高松宮を総裁として継続されている。上野公園竹之台に協会の陳列館があったが、現在では「上野の森美術館」に変貌した。明治時代、我国の美術界の中心的存在であったが、明治40年（1907年）に文部省に美術課が設立され、文部省美術展覧会（文展）が開催されるようになると、当初の重要な役割は次第に退潮していった。会頭、副会頭、実行委員は会員の選挙で選ばれており、大正6年当時は、土方久元伯爵が会頭となっていた。副会頭は金子堅太郎、実行委員は和田維四郎、三井八郎次郎、古河虎之助であった。
- 14) 立教大学：明治7年（1874年）、ウイリアムズ主教により東京築地に英語と聖書を教える私塾がスタートし、立教学校と称した。1896年には立教学校を廃止し、立教専修学校と立教尋常中学校を設置した。1907年の専門学校令により、立教大学として発足した。大正7年（1918年）に池袋に移転し、本館、図書館などが落成した。大正11年（1922年）に大学令による大学として認可された。1949年に新制大学として認可され、現在に至っている。
- 15) 松浦鎮次郎（1868～1945）：愛媛県宇和島出身。東京帝国大学法学部卒業後、内務省に入った。文部省参事、専門学校局長、文部次官を経て、昭和4年には九州大学総長、昭和15年には文部大臣となった。大正6年より9年にかけて、明治維新以降の教育制度を大幅に見直し改革するための大学令制定に向けて、松浦鎮次郎は岡田良平文部大臣、田所美治文部次官らとともに総力を挙げていた。その中であって、松浦は東京医学専門学校の承認を最後まで反対した。高橋琢也と松浦鎮次郎との壮絶なやりとりは高橋琢也日記に記述されてある。その後、高橋琢也の真意を知って東京医学専門学校が設立されたのち、評議員となった。高橋琢也の葬儀（昭和10年）には福岡より参列した。
- 16) 高橋琢也：高橋琢也日記（大正5年～昭和3年）（東京医科大学歴史史料室に保存）
- 17) 有吉鴨外：高橋翁の精力主義と東京医専 国論（東京医学専門学校創立記念）4：58-59, 1918
- 18) 中濱東一郎：中濱東一郎日記（大正5年および大正6年）富山房書店 1993
- 19) 高田早苗（1860～1938）：江戸出身。東京大学文学部（明治15年）を卒業したのち大隈重信の立憲改進黨に参加した。大隈とともに早稲田大学の前身である東京専門学校の設立に参加し、その運営に注力した。1907年早稲田大学初代学長、大正12年（1923年）より9年間同

大学総長を務めた。この間、大隈重信内閣で文部大臣（大正4年より大正5年まで）となった。康有為ら中国亡命者の保護活動にも力を貸したが、そこで高橋琢也と接点があったと考えられる。

- 20) 大隈重信（1838～1922）：佐賀藩出身。明治15年（1882年）に小野梓らと立憲改進黨を結成するとともに、高田早苗らと東京専門学校を設立した。明治21年より外務大臣に就任し不平等条約改正のために尽力するが、明治22年に爆弾テロによる負傷を負う。この時大隈重信の命を救ったのが、佐藤進（順天堂第三代当主）であった。明治30年には農商務大臣となり、長州藩・井上馨らと近い高橋琢也を非職とした。明治31年（1898年）に薩長藩閥以外から初めての内閣総理大臣となった。大正3年（1914年）にシーモンズ事件で辞職した山本権兵衛の後を受けて、組閣した。
- 21) 寺内正毅（1852～1919）：長州藩出身。日露戦争末期の陸軍大臣。大正5年10月より大正7年9月まで内閣総理大臣を務めた。
- 22) 山根正次（1857～1925）：長州萩藩の御典医・山根孝中の子息。明治15年（1882年）に東京大学医科大学を卒業。森鷗外、中濱東一郎の一年後輩であった。衛生学、法医学の専門家。司法省に入省したのち、ヨーロッパに留学し各国の衛生行政制度を研究した。我国の警察医務の基礎をつくり、朝鮮ではらい病院の設立に貢献した。明治35年（1902年）より衆議院議員。私立日本医学専門学校設立に関わり、理事長を務めたが、長期不在のため学生達のストライキに対して対応できず、大正7年に退任した。大正9年に政界を引退した。
- 23) 岡田良平（1864～1934）：静岡県掛川出身。明治20年（1887年）、東京帝国大学文学部卒業。1893年に文部省へ入省したのち、長く文部官僚を務めた。1916年には寺内内閣で文部大臣となり、それまでの帝国大学令を改正し、大学令を制定した。1924年の加藤内閣、1926年の若槻内閣でも文部大臣を歴任した。
- 24) 田所美治（1871～1950）：明治28年（1895年）、帝国大学法科大学（東京帝大法学部）卒業。文部省に入省し、長く文部官僚を務めた。大正5年10月より文部次官を務め、大正7年9月よ

り貴族院議員。高橋琢也とは懇意であった。

- 25) 臨時教育会議：帝国大学令が時代にそぐわなくなってきたことから、大正5年、寺内内閣の岡田良平文部大臣は国立大学、私立大学を含めて欧米並みに新しい大学を認めようという大学令制定を目指した。臨時教育会議はその諮問委員会であった。大学令は岡田良平文部大臣、田所美治文部次官、松浦鎮次郎専門学校局長らにより進められ、戦前の我国における最大の教育改革であるといわれた。
- 26) 天野郁雄：大学の誕生 中公新書（上）（下）2004年
- 27) 元田作之進（1862～1928）：久留米藩出身。明治19年（1886年）に渡米し、ケニヨン大学を卒業。さらにフィラデルフィア神学校を卒業し、教会長老となった。帰国後は立教中学教員となり、明治40年に立教大学初代学長となり、大正6年当時の学長でもあった。大正6年は立教大学が築地より池袋へ移転の最中であり、本格的な私立大学（大正9年までは大学の名前は冠していたが、専門学校であった）としてスタートを切ろうとしていた。ここに医学部併設の構想が持ち上がり、文部省もそれを支援したことから、高橋琢也の東京医学専門学校設立に大きな障害となっていた。
- 28) 金子堅太郎（1853～1942）：福岡藩出身。明治維新後に米国ハーバード大学に留学し、法律を学んだ。伊東己代治、井上毅らとともに、大日本帝国憲法の起草に参加。日露戦争では米国で外交交渉などに当たった。生涯、日米友好のために尽力し日米同志会の会長を務めた。大正6年には日米協会会長に就任した。高橋琢也が明治30年に森林法制定を策定したときの、農商務省次官であり、それ以来高橋琢也とは懇意の間柄であった。高橋琢也が進める新医学校設立の途中で、立教大学医学部設立構想が浮上したさい、高橋琢也に米国での状況をいち速く伝えた。また、日本美術協会の副会長であったことから、高橋琢也や学生達の進める日本美術協会での絵画頒布会に多大な協力をした。
- 29) 土方久元（1833～1918）：土佐藩藩士。幕末は坂本竜馬や中岡慎太郎とともに薩長同盟締結に活躍。維新後は東京府判事、宮内顧問官、元老院議官を歴任。明治18年（1885年）に農商務

大臣となるが、この時期に高橋琢也は陸軍参謀本部より農商務省山林局に移籍した。その後は明治天皇を支える宮内大臣として活躍。明治28年に伯爵。大正6年（1917年）には日本画家たちの協会、日本美術協会の会頭となった（副

会頭：金子堅太郎、実行委員：和田維四郎）。高橋琢也は明治30年以降は宮内省顧問となったことから、土方とは入魂の間柄となった。

- 30) 長委三美：東医の礎（東京医科大学開学の礎）
東京医科大学刊、2008年